

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第532集

かみまち

上町遺跡発掘調査報告書

馬淵川沿岸（一期）農業水利事業関連遺跡発掘調査

2008

農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所
(財) 岩手県文化振興事業団

上町遺跡発掘調査報告書

馬淵川沿岸（一期）農業水利事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、馬淵川沿岸（一期）農業水利事業に関連して平成19年に発掘調査された二戸市上町遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代の陥し穴・土坑などの遺構を検出した他、遺物包含層から縄文時代晩期中葉の土器・石器などの遺物が出土し、該期の良好な資料を得ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所、二戸市教育委員会、二戸市埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年10月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本書は、岩手県二戸市金田一字新田野26-7 ほかに所在する上町遺跡の発掘調査成果の報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、馬淵川沿岸（一期）農業水利事業に伴い、農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 本遺跡の遺跡番号、遺跡略号は以下のとおりである。
　遺跡番号：IE89-2346／遺跡略号：KM-07
- 4 野外調査面積及び調査期間、室内整理期間は以下の通りである。
　調査面積：180m²
　野外調査期間：平成19年4月9日～5月14日
　室内整理期間：平成20年2月1日～3月31日
- 5 野外調査は川又　普・北出　勲が担当した。室内整理は川又が担当した。
- 6 本書の執筆は「I 調査に至る経過」については東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所に原稿を依頼した。その他の執筆・編集は川又が行った。
- 7 各種鑑定・分析は以下の機関に委託した。
　基準点測量・・・・・・・株式会社樺半測量設計
　航空写真撮影・・・・・・・東邦航空株式会社
　火山灰分析・・・・・・・株式会社パリノ・サーヴェイ
　石材鑑定・・・・・・・花崗岩研究会
- 8 本書で用いる座標値は新座標（世界測地系）に準拠している。レベル高は海拔である。
- 9 本報告書で使用した地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図を使用した。
- 10 本書で使用した土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」によった。
- 11 遺物番号は連番で、写真図版と対応している。
- 12 本書で使用した構造種別による略号は以下の通りである。
　S K：土坑・陥し穴　P：ピット（柱穴状土坑）
- 13 野外調査及び本報告書の執筆にあたり、二戸市教育委員会、二戸市埋蔵文化財センターから多大なご協力をいただいた。
- 14 出土遺物及び調査に関わる諸記録は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡周辺の環境	
1 位置と立地	3
2 周辺の地形	3
3 周辺の遺跡	4
4 基本層序	6
5 調査方法	6
6 調査経過	11
III 検出遺構と出土遺物	
1 検出遺構	12
2 包含層出土遺物	13
IV ま と め	33
V 自然科学分析	
1 上町遺跡における火山灰分析調査報告	39
報告書抄録	67

図版目次

第1図 岩手県全図	1	第14図 土器（4）	22
第2図 遺跡の位置	2	第15図 土器（5）	23
第3図 周辺の遺跡	5	第16図 上器（6）	24
第4図 地形分類図	7	第17図 土器（7）	25
第5図 調査区全体図	8	第18図 土器（8）	26
第6図 遺構配置図	9	第19図 土器（9）	27
第7図 基本層序	10	第20図 土器（10）	28
第8図 遺構（1）SK01～03	16	第21図 石器（1）	29
第9図 遺構（2）SK04～06	17	第22図 石器（2）	30
第10図 遺構（3）柱穴状土坑	18	第23図 石器（3）	31
第11図 土器（1）	19	第24図 石器（4）	32
第12図 上器（2）	20	第25図 グリッド別土器出土重量	33
第13図 土器（3）	21		

表目次

第1表 周辺の遺跡	4	第3表 土器観察表	35
第2表 グリッド別土器・剥片出土重量	34	第4表 石器観察表	38

写真図版目次

写真図版1 航空写真（1）	43	写真図版13 土器（2）	55
写真図版2 航空写真（2）	44	写真図版14 土器（3）	56
写真図版3 遺跡全景	45	写真図版15 土器（4）	57
写真図版4 基本層序	46	写真図版16 上器（5）	58
写真図版5 遺構	47	写真図版17 土器（6）	59
写真図版6 遺物出土状況（1）	48	写真図版18 土器（7）	60
写真図版7 遺物出土状況（2）	49	写真図版19 上器（8）	61
写真図版8 遺物出土状況（3）	50	写真図版20 土器（9）	62
写真図版9 遺物出土状況（4）	51	写真図版21 石器（1）	63
写真図版10 検出状況（1）	52	写真図版22 石器（2）	64
写真図版11 検出状況（2）	53	写真図版23 石器（3）	65
写真図版12 土器（1）	54	写真図版24 石器（4）	66

I 調査に至る経過

上町遺跡は、「国営馬淵川沿岸農業水利事業 左岸用水路付帯施設（その3）工事の内、金田一給水管路工事」の施行に伴いその事業区域内に埋蔵文化財が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

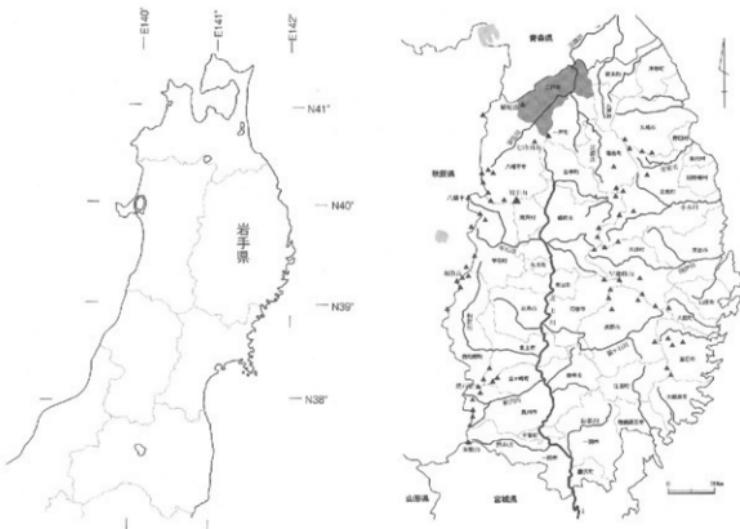
金田一給水管路は一級河川馬淵川から米沢揚水機場のポンプアップにより取水し、左岸幹線用水路から米沢吐出水槽を経由し野々上ファームボンド手前から分水される金田一支線用水路の末端で、二戸市金田一地内約20haの畑にかんがいするためのパイプラインである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成18年7月18日付18馬淵第368号「馬淵川沿岸農業水利事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

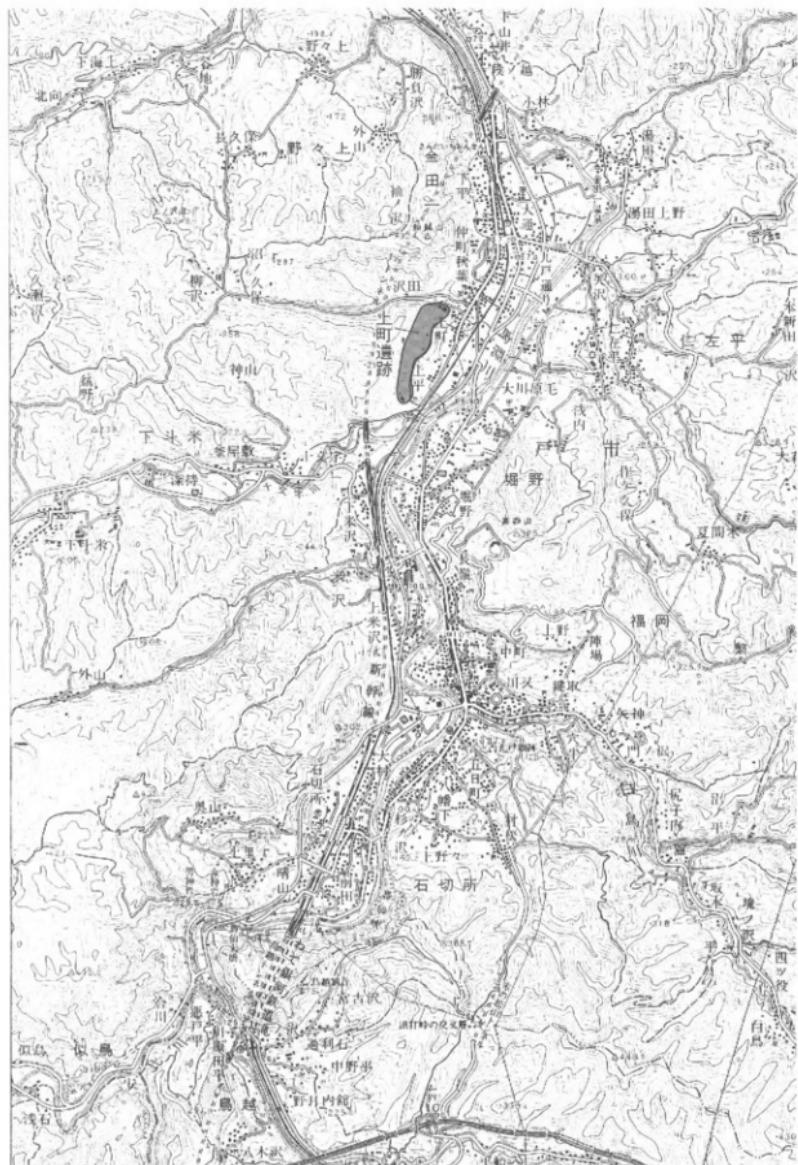
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年9月20日に試掘調査を実施し、工事に着手するには上町遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年10月17日付教生第978号「馬淵川沿岸農業水利事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（通知）」により当事業所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事業所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年4月2日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

（東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所）



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡の位置

II 遺跡周辺の環境

1 位置と立地(第1・2図)

上町遺跡は、IGRいわて銀河鉄道金田一温泉駅の南約2km、二戸市役所の北東約3kmに位置する。上町遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「一戸」NK54-18-11及び、2万5千分の1地形図「陸奥福岡」NK54-18-11の図幅中に含まれ、北緯40度18分32秒、東経141度17分51秒付近に位置し、馬淵川左岸の河岸段丘上に立地する。

遺跡の所在する二戸市は、岩手県の北部に位置し、平成18年1月に旧・二戸市と二戸郡淨法寺町の合併により成立した。市域総面積は420.31km²、西に八幡平市、南に一戸町、東に九戸村・軽米町と境を接し、北は青森県三戸町・南部町・田子町等との県境を接する。平成17年10月時点での総人口31,480人、人口密度74.9人/km²、岩手県北においては沿岸部の久慈市と並ぶ内陸部の中心市である。二戸市福岡付近では年平均気温10℃前後と県内でもかなり涼冷な地帯にあたり、年平均降水量は1000mm程度で、県平均よりもかなり少ない。

2 周辺の地形(第4図)

本遺跡の所在する二戸市は、青森県との県境に、東を北上山地に、西を奥羽山脈に挟まれる形で位置し、中心を馬淵川が北流している。馬淵川は、北上山地北部(葛巻町多々良山)を源流とし、沢内川、安比川、十文字川等の支流を統合しながら青森県八戸湾に流れ込んでいる。緩やかに曲流するこの馬淵川によって、市内の石切沂地区から金田一地区にかけて、数段の段丘と狭い沖積平野が形成されている。段丘群は、高位から仁左平・福岡・長嶺・米沢・堀野・中曾根といった段丘に区分されている。

段丘上には十和田火山群を起源とする噴出物が堆積しており、間欠的に堆積した火山灰は、地形面や地層を対比するための鍵層となっている。標高200～140mの仁佐半段丘上は、チャート・頁岩からなる疊層の上に高鈴火山灰以上の火山灰をのせている。続く標高140～100mの福岡段丘は、火山灰凝灰岩台地の性格を持ち、八戸火山灰(12,700±260BP)以上の火山灰が堆積する。米沢段丘は馬淵川東岸の中町段丘と西岸の堀野段丘に区分される。標高は110～100m、沖積段丘の古期面に相当し、南部浮石(8,600±250BP)以上の火山灰が堆積する。さらに低位の中曾根段丘は、中振浮石(4,400±140BP)の堆積がみられるが、南部浮石は乗せない段丘であるとされている。

上町遺跡は、馬淵川西岸の福岡段丘上に立地する、南北約1,100m、東西約250mの細長い範囲である。遺跡の西側は段丘陵地である。東側は下位の段丘面となり、市街地として利用されている。北方には沢田川、南方には十文字川が流れ、いずれも東流して馬淵川に合流する。遺跡範囲の大半は、畠地として利用されている。今回の調査区は遺跡の北側に位置する。調査区周辺は東向きの緩斜面で、標高は120～130mである。

3 周辺の遺跡 (第3図)

二戸地区では、縄文時代から中世まで、多数の遺跡が確認されている。これらの遺跡は、馬淵川とその支流の流域、特に馬淵川西岸に多く分布しており、段丘面では、米沢段丘と堀野・福岡段丘に多く立地している。遺跡の時代や時期は複合している場合が多く、そのほとんどが縄文時代と古代の複合遺跡である。

上位の福岡段丘上には、縄文・弥生・中世の複合遺跡の火行塚遺跡、縄文・古代・中世の複合遺跡である上里遺跡、中世の城跡である佐々木館跡の遺跡が分布している。国の史跡指定を受けた中世の城館跡、九戸城跡はこの段丘上に位置する。

下位の米沢段丘上には、長瀬遺跡群・家の上遺跡・荒谷遺跡・荒谷B遺跡・上村遺跡・下村遺跡・沢内遺跡・上田面遺跡など縄文時代と古代・中世の複合遺跡が多く分布している。

馬淵川対岸の堀野段丘上に位置する堀野遺跡は、縄文・古代の複合遺跡である。

No.	遺跡名	種別	遺跡・遺物	時代
1	野々上II	散布地	縄文土器	縄文
2	出張	集落跡	土師器	奈良・平安
3	野々上館	城館跡	剣刃	奈良・平安
4	野々上III	散布地	縄文土器	縄文
5	伊鳴	散布地	縄文土器	縄文
6	林向	散布地	縄文土器	縄文
7	上の沢I	散布地	縄文土器	縄文
8	上の沢II	散布地	縄文土器	縄文
9	勝負沢I	集落跡	土師器	奈良・平安
10	勝負沢II	散布地	縄文土器	縄文
11	勝負沢III	散布地	縄文土器	縄文
12	下山井	散布地	縄文土器	縄文
13	下山井前	城館跡		中世
14	段ノ鶴	散布地	縄文土器	縄文
15	駒場	集落跡	環状集落・鍔矢	平安
16	人跡	散布地	縄文土器(中期)	縄文
17	馬場	集落跡	土師器	奈良
18	秋葉	散布地	縄文土器	縄文
19	四戸城(金田一城)	城館跡	空堀・平場・土呂	中世～近世
20	沖	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
21	八ツ長I	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
22	八ツ長II	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
23	八ツ長III	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
24	八ツ長IV	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
25	戸花	散布地	縄文土器	縄文
26	荒田I	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
27	荒田II	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
28	荒田III	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
29	荒田IV	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
30	上田面II	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
31	上町	散布地	縄文土器	縄文
32	大川原毛	散布地	縄文土器	縄文
33	堀野	集落跡・祭祀跡	古墳・矛手刀・堅穴住居・配石 方形周溝墓・住居跡・土師器・鉄製品	縄文・古代 弥生・古代
34	上山面	集落跡		
35	海老田	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
36	細越	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
37	笠屋敷	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
38	I文字	散布地	縄文土器・土師器	縄文・古代
39	長嶺	散布地	縄文土器	縄文
40	佐々木前(総村前)	散布地・城館跡	縄文土器・土師器・壙	中世
41	米沢	集落跡	縄文土器・土師器	縄文・古代
42	下村	集落跡	配石・住居跡	縄文・古代
43	堀野前	城館跡	空堀・平場・土師器	中世

第1表 周辺の遺跡



第3図 周辺の遺跡

4 基本層序 (第7図)

I～IX層に大別している。I層上面が現地表面である。I層は、道路の表土・盛土で、砂利を主体とする。II層は堅く締まる暗褐色土で、これも道路の盛土とみられる。I・II層は、近現代に形成された層である。III層は十和田a火山灰層（約1,100年前）である。調査区西側の斜面から平坦部に至る傾斜変換点の周辺では比較的良好に堆積するが、東側では堆積はみられない。層厚は厚い所でも2cm程度で、断続的に堆積する。IV層は、IVa・IVb・IVc層に細分した。IVa層は黒色土で、白色粒子を全体に含む。この白色粒子は十和田bテフラであることが火山灰分析により判明している。IVa層は縄文時代晚期の遺物を最も多く包含する。IVb層は黒褐色土。この層の上面が縄文時代晩期の生活面であったとみられる。IVc層は暗褐色土で、下のV層を起源とする中揮浮石（アワズナ）を含む。V層は中揮浮石層（約5,500年前）の純層で、層厚は最大10cm前後である。VIa・VIb層は南部浮石（ゴロク）を含む黒色土で、VIb層は南部浮石の混入量が多い。VII層は南部浮石層（約8,600年前）の一次堆積層である。

調査区内の標高は120～130mで、西側から東側へ行くにつれ標高が低くなる。西端から24グリッドまではやや傾斜があり、24グリッドから55グリッドにかけては平坦に近く、55グリッドで最も標高が低くなる。55グリッドから76グリッドまで緩やかに上がり、その東側は再び傾斜が急になる。

5 調査方法

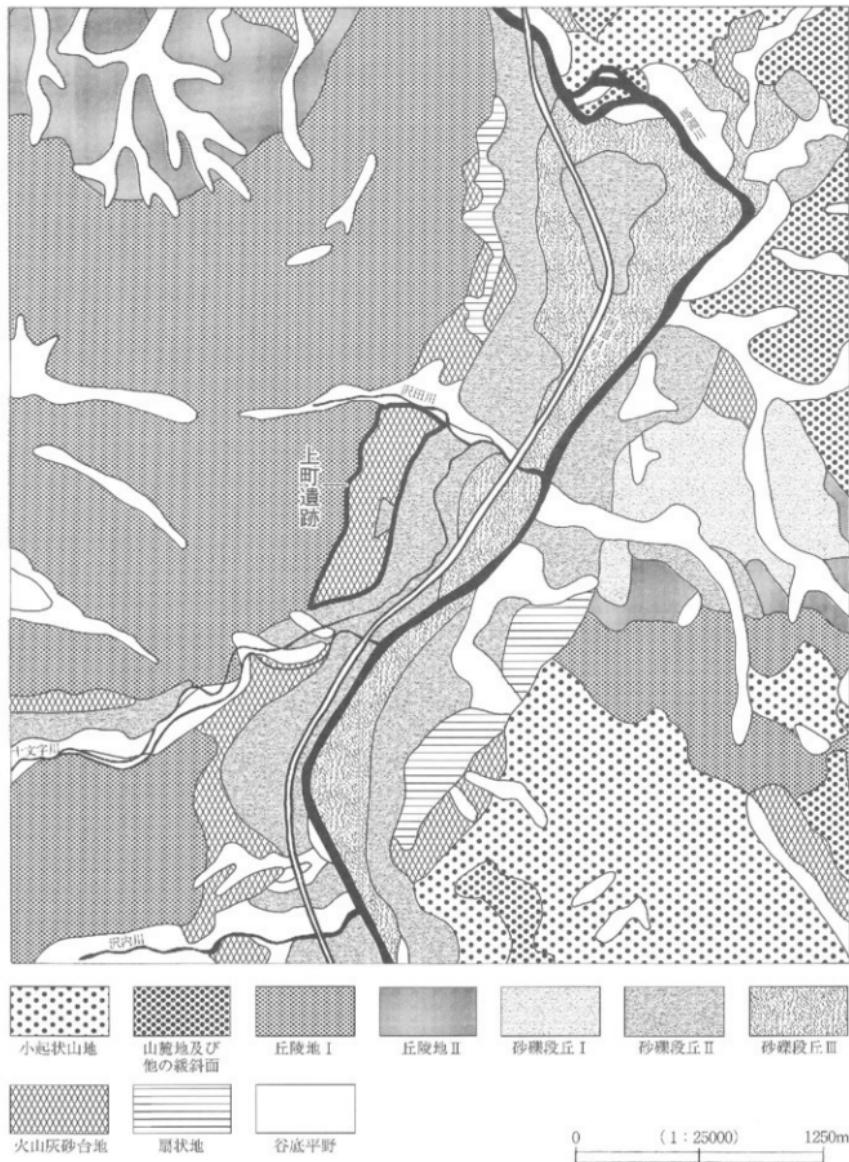
表土除去はバックホーを用いて行った。調査範囲が狭いことから、用いたバックホーは0.2m³の小型の機種である。表土除去は、十和田a火山灰であるIII層上面までを日安に行なった。表土除去を行なった箇所から順次、人力による遺構検出を行なった。遺構の有無を確認し、遺構が確認されなかつた箇所は下層へ掘り下げて検出、遺構が確認された場所は精査後に掘り下げ、再検出といった作業を繰り返した。最終調査面は、中揮火山灰層のVIa層とした。

グリッドは、調査区の長軸方向がX系座標の方向と異なることから、任意の軸を基準として設定した。列方向を数字で1・2…90、行方向をアルファベットでa・b…jのように2m毎に区切り、グリッド名は、1a・2a…1b・2bのように名付けた（第6図）。基準点はこのグリッドに沿うように打設した。基準点の座標値は表の通りである。遺物の取り上げについては、行方向の区切りを省略している。例えば、15グリッド出土と言えば、15b・15cの2グリッド分をまとめたものを指す。すなわち、細長い調査区を2m幅で区切ったものを遺物の取り上げ単位とした。

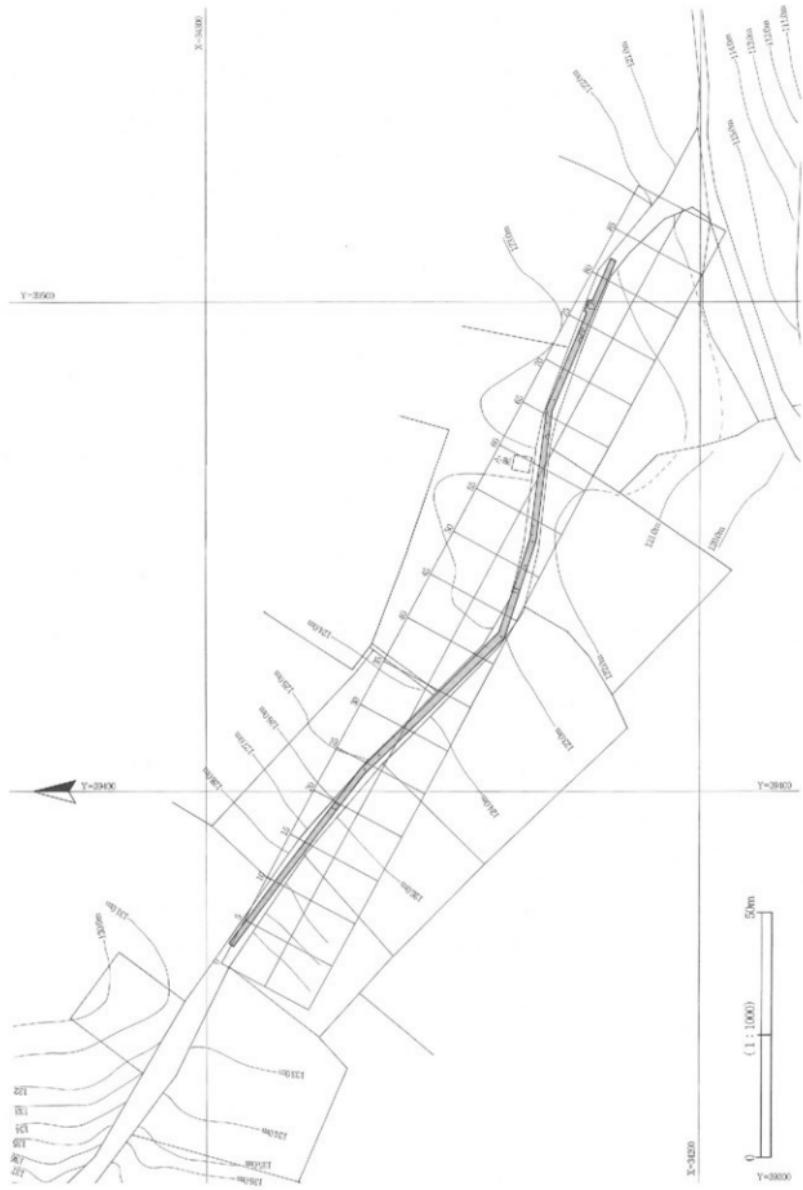
検出した遺構に対し、検出順に遺構名を付した。遺構名は、SK（陥し穴状遺構・土坑）、P（柱穴状土坑）などの略号を使用した。

写真撮影は、6×7判中判カメラ（モノクロ）、一眼レフデジタルカメラを基本的に使用し、35mmカメラ（モノクロ）を補助的に使用した。

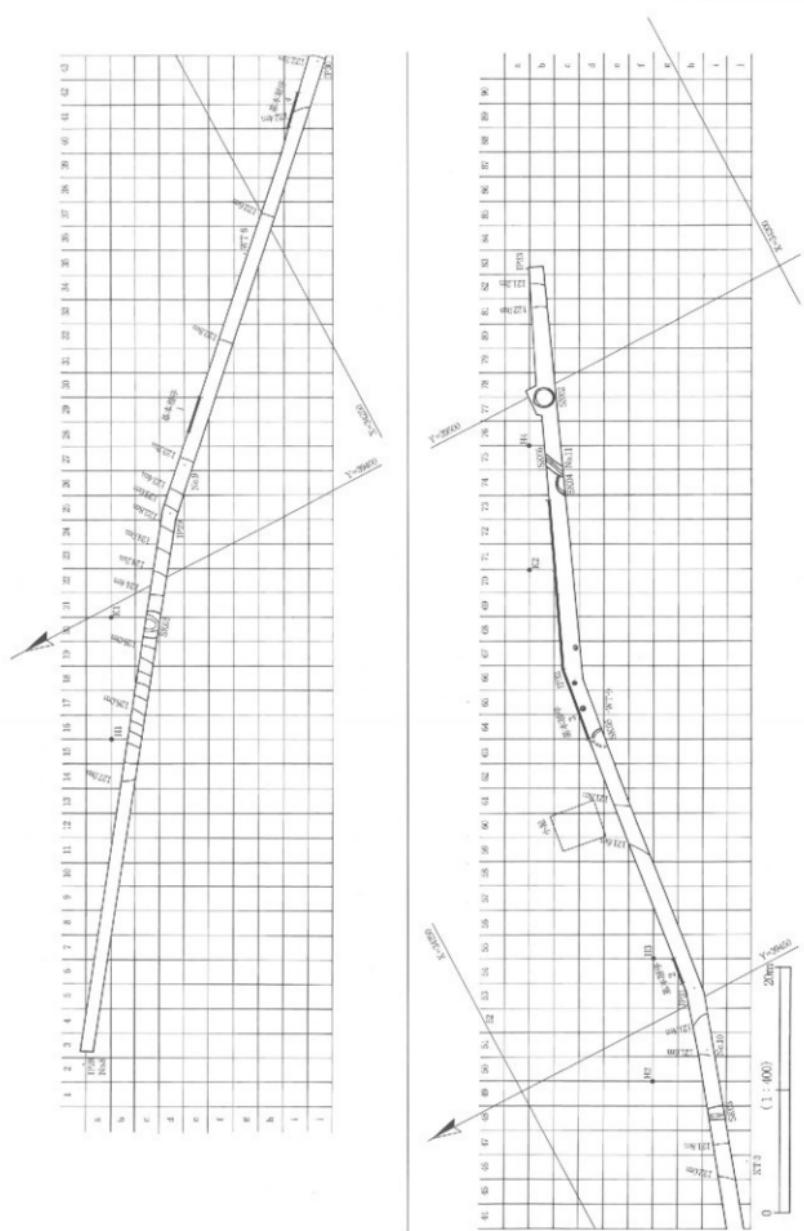
断面図は、レベルを用いて水糸を張りそれを基準として行った。平面実測は水糸によるメッシュを張るのが困難なため、業務委託で打設した基準杭をもとに、すべて光波を用いて測量を行なった。



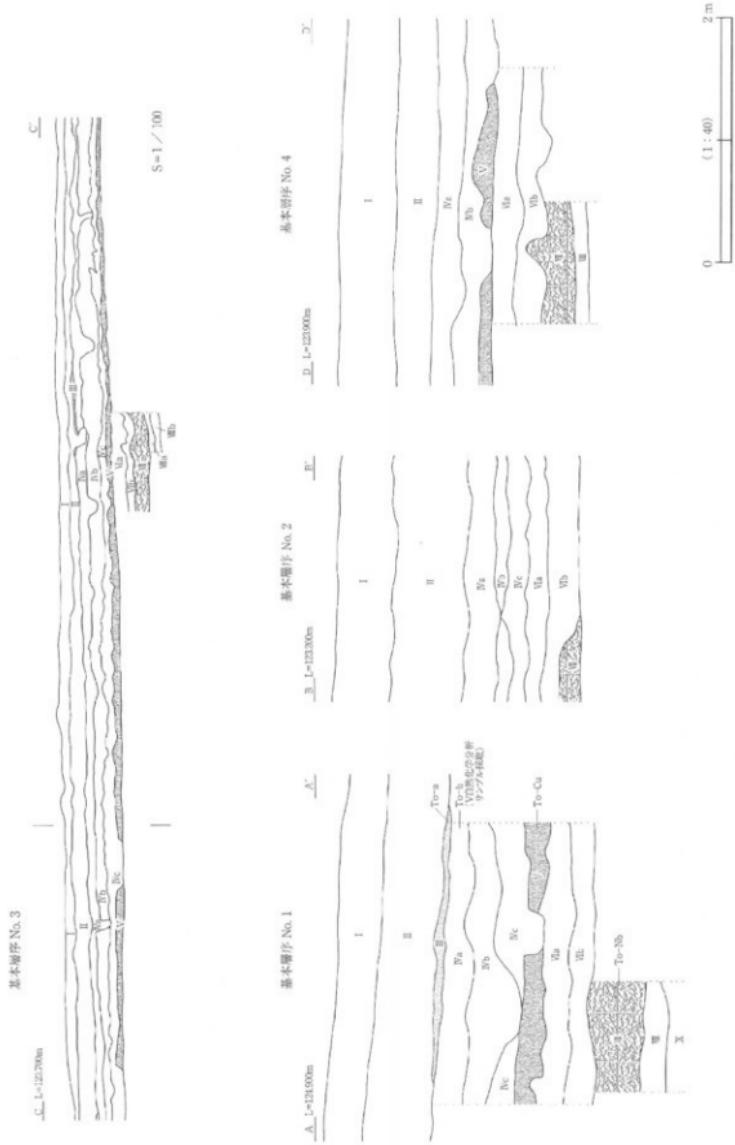
第4図 地形分類図



第5図 調査区全体図



第6図 遺構配置図



第7図 基本層序

6 調査経過

平成19年4月9日、資材を搬入し調査を開始した。調査原因はパイプライン工事に伴うもので、調査区は道路（法定外道路）下の幅約1m、全長180mの細長い範囲である。この道路は砂利敷で、畑へ至るための通路として利用されており、調査開始前に道路使用許可を申請した。

調査にあたる最大の問題点は、この道路の通行を確保しつつ調査を進めなければならないことであった。掘削すれば通行が不可能となるため、調査区脇の畠地に調査区沿いに7mの幅で借地を行なった。この部分を仮設道路・耕土置き場として利用した。

4月10日に、バックホーによる表土除去を開始した。Ⅲ層上面までを目安とし、基本的に調査区北側から南側に向かって進めていった。掘削した廃土はそのまま調査区脇の借地部分に置いて行った。調査区北端部と南端部は、脇に仮設道路が設置できなかったため調査を後回しにした。この部分については後に表土除去を行ったところ、遺構が検出されなかっただめすぐに埋め戻した。4月12日に基準杭打設を行った。

その後、人力による作業で、検出・下層への掘り下げを繰り返すことになるが、地表面から最終検出面までの深さは、深いところで約1.70mとなった。一部の地点については、その以下のⅣ層上面、もしくはそれ以下の面までトレンチを掘り下げ確認を行っている。掘削深度が深くなると調査区脇に盛り上げた廃土の山も高くなり、耕土の搬出が非常に困難となった。

調査終了間際の5月8日に航空写真撮影を行なった。5月9日に、県教育委員会生涯学習文化課による終了確認を行った。その後、トレンチを増やし、Ⅵa層以下の確認を可能な限り行なったが、遺構・遺物とも検出されなかった。5月10日からバックホーによる埋め戻しを開始し、5月14日まで埋め戻しを行なった。埋め戻しと並行して、仮設道路・残土置き場として利用した畠部分の石拾いなどを行い、調査前の状態に戻した。

5月14日に資材を搬出し、すべての作業を終了した。

基準点名	x 座標	y 座標	標 高
K1	34276.200	39399.076	126.077
K2	34229.698	39487.606	123.273
H1	34280.850	39390.223	127.579
H2	34240.376	39445.773	123.012
H3	34235.726	39454.626	123.021
H4	34225.048	39496.459	123.542

上町遺跡基準点一覧表 (座標値は世界測地系)

III 検出遺構と出土遺物

1 検出遺構

検出遺構は、陥し穴2基、土坑4基、柱穴状小土坑3個である。調査区が狭いため、遺構の一編しか確認できなかったものがほとんどである。

S K01土坑（第8・11図、写真図版5・12）

20cグリッド付近に位置する。IVc層上面で検出した。遺構の北端と、南端とも調査区外にあり不明であるが、平面形は橢円形に近いと推定される。調査区内で確認できた東西の幅は、開口部2.20m、底部0.96mである。確認面から底面までの深さは1.10mで、VII層まで掘りこまれる。底面は平坦で、壁は外傾する。埋土は黒色土主体である。遺物は、縄文土器片5点(63g)が出土し、このうち1点(1)を掲載した。1は、壺の肩部で、地文のみである。縄文時代の造構と考えられるが、時期の詳細や性格は不明である。

S K02土坑（第8・11図、写真図版5・12）

77bグリッド付近に位置する。IVc層上面で検出した。平面形は橢円形で、長軸方向はN-30°-Eである。規模は、開口部径1.70×1.50m、底部径1.40×1.25m、確認面から底面までの深さは0.60mである。底面は概ね平坦で、壁はやや外傾する。埋土は黒褐色土主体で、南部浮石を含む。底面はVII層まで掘りこまれる。遺物は、縄文土器109点(1,674g)が出土し、このうち8点(4~11)を掲載した。4は粗製深鉢の口縁部で、地文のみ施される。5~7は鉢の口縁部である。5は口縁部が内側へ屈曲する。2条の細い沈線が巡り、その間に刺突が施される。6は頸部にくびれを持つ器形で、体部には磨消繩文が施される。7は口縁部付近まで磨消繩文が施される。8は浅鉢の口縁部で、沈線で曲線的に文様が描かれる。9~11は台付鉢である。9は頸部付近に大突起を持ち、体部上半と台部に「C」字の文様が描かれる。10は台部のみである。11は小形で、全体に地文が施される。出土遺物から、縄文時代晩期中葉頃の造構と推定される。

S K03陥し穴（第8図、写真図版5）

48iグリッド付近に位置する。IVc層上面で確認した。遺構の北端、南端ともに調査区外にあり全容は不明であるが、平面形は溝状で、長軸方向は調査区とほぼ垂直方向のN-18°-E付近と推定される。長軸方向は、確認できた範囲で全長1.00mである。短軸方向は、開口部幅1.20m、底部幅0.20mで、開口部から底部にかけて窄まる形状である。確認面から底面までの深さは1.10mである。底面はVII層まで掘りこまれる。出土遺物がなく時期の詳細は不明であるが、形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

S K04土坑（第9図、写真図版5）

74cグリッド付近に位置する。IVc層上面で確認した。遺構の南東側は調査区外にあり不明であるが、平面形は橢円形と推定される。SK06陥し穴と重複し、これを切る。調査区内で確認できた部分は、開口部径2.10m、底部径1.50mで、確認面から底面までの深さは0.60mである。底面は平坦で、

壁はやや外傾する。底面はⅣ層まで掘りこまれる。遺物は、縄文土器6点(43g)が出土したが、体部の小破片であるため掲載しなかった。縄文時代の遺構と考えられるが、時期の詳細や遺構の性格は不明である。

S K05土坑(第9図、写真図版5)

61dグリッド付近に位置する。IVc層上面で検出した。遺構の南側は調査区外にあり不明である。埋土は黒褐色土が主体であるが、壁をなすIVb層との識別が難しく、西側は掘り過ぎてしまった。底面は平坦で、壁はやや外傾する。底面に径0.15m程度の副穴1個を作り。遺物は、縄文土器4点(49g)が出土したが、地文のみの体部小破片であり掲載しなかった。縄文時代の遺構と考えられるが、時期の詳細や遺構の性格は不明である。

S K06陥し穴(第9・11図、写真図版5・12)

74cグリッド付近に位置する。VIc層上面で検出した。遺構の東端、西端は調査区外にあり不明であるが、平面形は溝状で、長軸方向はN-75°-Eである。確認できた範囲では、長軸方向の全長が1.30mで、開口部幅0.80m、底部幅0.16m、深さ0.80mである。SK04土坑に切られる。検出時プランは明瞭ではなく、SK04土坑の精査中によく確認できた。遺物は、縄文土器4点(24g)が出土し、このうち2点(2・3)を掲載した。いずれも鉢の口縁部である。2は口縁部付近に平行沈線3条が施され、その下位は地文である。3は頭部にくびれを持つ器形で、頭部は無文、頭部の付け根に刺突穴、体部下位に磨消縄文が施される。出土遺物から、縄文時代晩期中葉の遺構と考えられる。

柱穴状土坑(第10図)

調査区東側の65~67グリッド付近で3個(P1~3)確認している。いずれも、V層上面で検出したが、掘りこみ面はこれより上層であった可能性もある。3基の配列は直線的ではなく、P1・P2間が約3m、P2・P3間が約2mと、間隔も異なる。建物を構成する柱穴であったと断定する根拠はない。埋土は黒褐色土が主体である。ピットの各規模は表通りである。出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

遺構名	グリッド	検出面	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
P1	67c	V層上面	0.28	0.24	0.44
P2	66c	V層上面	0.28	0.28	0.22
P3	65d	V層上面	0.34	0.32	0.18

柱穴状土坑一覧表

2 包含層出土遺物

遺物包含層(写真図版6~9)

出土した土器の総重量は61,099gである(調査区外で表採した4,833gを含む)。遺構内の出土重量は1,853gで、遺構外の出土重量は54,413gである(出土地点不明のものが3,529gあり、出土地点の分かることは50,884gである)。各グリッドの遺物出土重量・点数は第3表に示した。調査区西端の1~15グリッドでは遺物は全く出土していない。16~60グリッドでは散発的に出土するものの、量は僅かである。61グリッドより東側では遺物が多く出土している。1グリッドあたりの出土重量は、61

～66グリッドで100～600g程度、67～75グリッドでは1,000g以上で、最大で8,994gが出土した。76・77グリッドでは800g前後である。78～83グリッドでは全く出土していない。67～77グリッドは、調査区内での面積比が約13%であるのに対し、土器出土重量は、全体の約80%を占める。出土層位はIV a・IV b層にかけての層厚20～30cmの範囲である。IV a層は十和田b火山灰を含む黒褐色土層である。遺物の概略は以下に述べる。

(1) 繩文土器・土製品（第11～20図、写真図版12～21）

12～129は遺構外、主に包含層出土の縄文土器である。主に器種を基準として分けて掲載したが、区分は厳密なものではなく、器高が口径より大きいものを深鉢、器高と口径がほぼ同じのものを鉢、器高が口径より小さいものを浅鉢としている。計測できない破片については推定により分けている。鉢には台付のものがある。器種はこの他に壺、ミニチュア土器がある。文様の特徴から人半が晚期中葉の大洞C 2式に比定されると考えられる。

12～29は粗製の深鉢である。12～14は内湾する器形で、13は口唇部に突起を持つ。15はやや外反する器形で、口唇部に押圧が施され、外面から内面へ穿孔されている。16～18は口唇部に刻みがあり、頸部には複数の沈線が平行に巡る。16・18は口唇部にB突起を持つ。19～22は口唇部に押圧が施され、頸部には多数の沈線が巡る。23～28も口唇部に押圧が施され、23・24の頸部は2条の沈線の間が無文となり、25～28の頸部は無文である。29は波状の口縁部で、頸部に沈線と無文帯を持つ。

30～56は鉢である。頸部と体部の境界で屈曲する器形で、口縁部は直立または内傾する。口縁部は波状のものと、平縁に細かい刻みが施されるものがあり、体部は無文である。30～37は頸部に沈線が巡り、35～37は沈線の間に連続刺突列がある。38～41は沈線が縦に連結し工字文となる。42・43は頸部と体部の境界に隆帯をもつ。45～53は、頸部が無文である。このうち50～53は頸部と体部の境界に突起がある。50～53は他の鉢に比べ小型である。50は底部付近が失われているが、台部が存在した可能性がある。53は体部が丸みを帯びた器形である。54～56は頸部がくびれ、直線的に外湾する。口唇部に深い刻みが施され、頸部と体部の境界に刺突列が巡る。56は体部にも沈線が施される。

57～66も鉢であるが、頸部で屈曲せず、底部から口縁部まで緩やかに立ち上がる器形である。57・58は波状の口縁で、体部下半の地文の上を沈線による曲線で区画し、一部を磨り消している。59・60は口縁部から体部下半まで地文のみであり、59は口縁部に突起を持つ。61～65は口縁部付近に2～3条の沈線が横位に巡る。63は器壁が薄い。64・65は沈線の間にも地文が施される。66は口唇部が内側へ折れ、その上面に沈線が施される。一部が山形の突起状となっている。

67～75は台付鉢である。67・68は頸部に沈線が巡り、体部は地文のみである。67・68とも口唇部に突起を持つが、67は突起の間に刻み、68は地文が施される。69は頸部と体部の間に隆帯を持ち、体部には地文の上に沈線により曲線が描かれる。70～74は台部のみである。70・73・74の台部は無文、71は地文のみ、72は4条の沈線が横位に巡り、縱方向の短い沈線がある。75は小形の台付鉢で、無文である。

76～95は浅鉢である。76～82は、頸部と体部の境界で屈曲し、隆帯が巡る。体部は、76～78が地文のみで、79～82は磨痕地文が施される。口唇部には刻みがある。83・84は体部に工字文が施される。85～88も頸部で屈曲するが、隆帯は持たず、頸部が無文である。89～92は口縁部まで緩やかに立ち上がる器形で、地文は施されない。89・90は内外面とも磨きが施され、口縁部に2条の沈線が巡る。93～95は小形の浅鉢である。93は、85をそのまま縮小したような器形・文様である。94は

丸底で、口縁部まで緩やかに立ち上がり、地文のみが施される。

96～109は、底部のみの被片で、ある。96～103は鉢または浅鉢、104～109は粗製の深鉢とみられる。102・103以外は地文が施される。

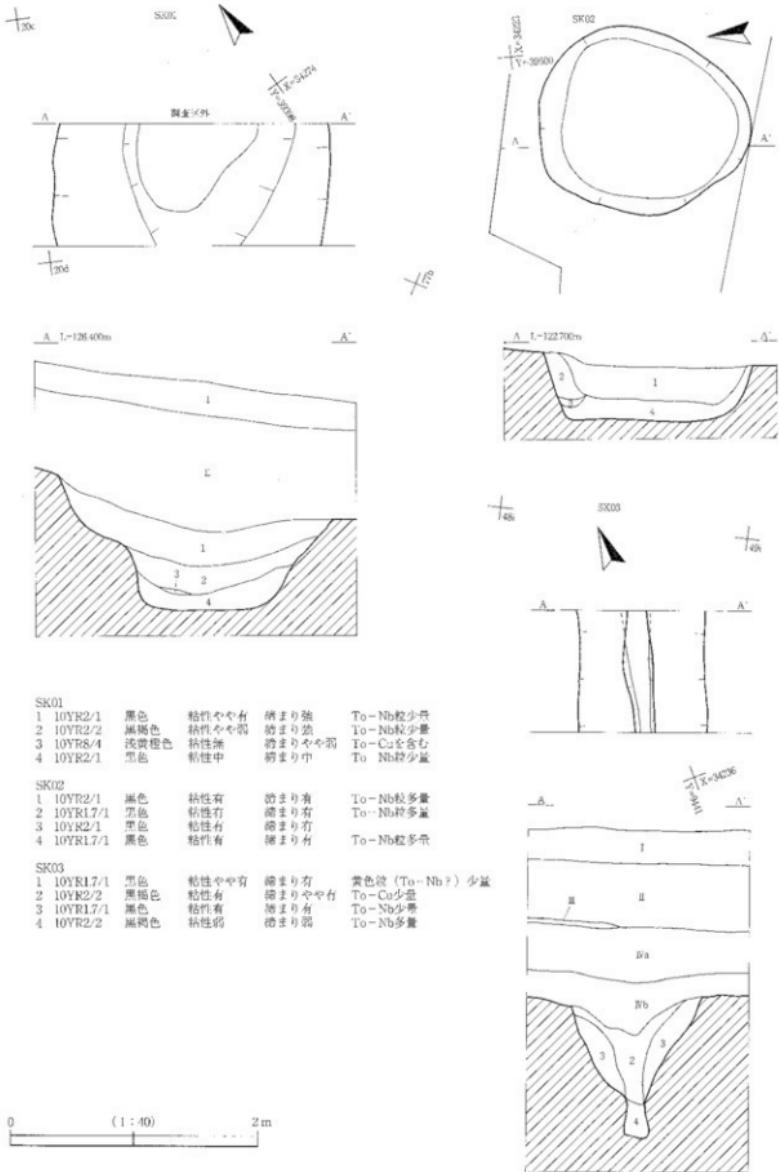
111～126は壺である。110～112は同一個体の可能性がある。頸部は無文で、体部上半は横位に数段の沈線が巡り、その間に磨消繩文が施される。体部下半は地文のみである。無文部分は丁寧に磨きが施され光沢がある。113は粗製の壺で、体部上半に最大径を持つ。頸部はやや内傾し、無文である。114～116は小形の壺である。114は頸部のみ無文である。115は体部上半に数段の平行沈線があり、その間がクランク状の沈線で区切られ、体部下半は地文のみである。頸部は無文で丁寧に磨かれ、上位に2条の沈線が巡る。116は口縁部に1条の沈線が横位に巡る他は、口唇部を含め全体に地文が施される。頸部はやや外傾する。117～120は壺の口縁部で、口唇部付近に沈線や突起などがみられる。119は朱塗りである。121は体部上半の無文部分に縱横の沈線がある。122・123は底部付近で、122は無文、123は地文のみである。124～126はミニチュアの壺で、126は台が付く。

127は中空の筒状で、注口土器の注口部と思われる。128は、一見浅鉢のようであるが、体部の曲がり具合などから舟形のような器形が想定できるため、そのように図化した。129は土偶の一部と推定されるが、部位は不明である。地文部と無文部が沈線で区切られる。

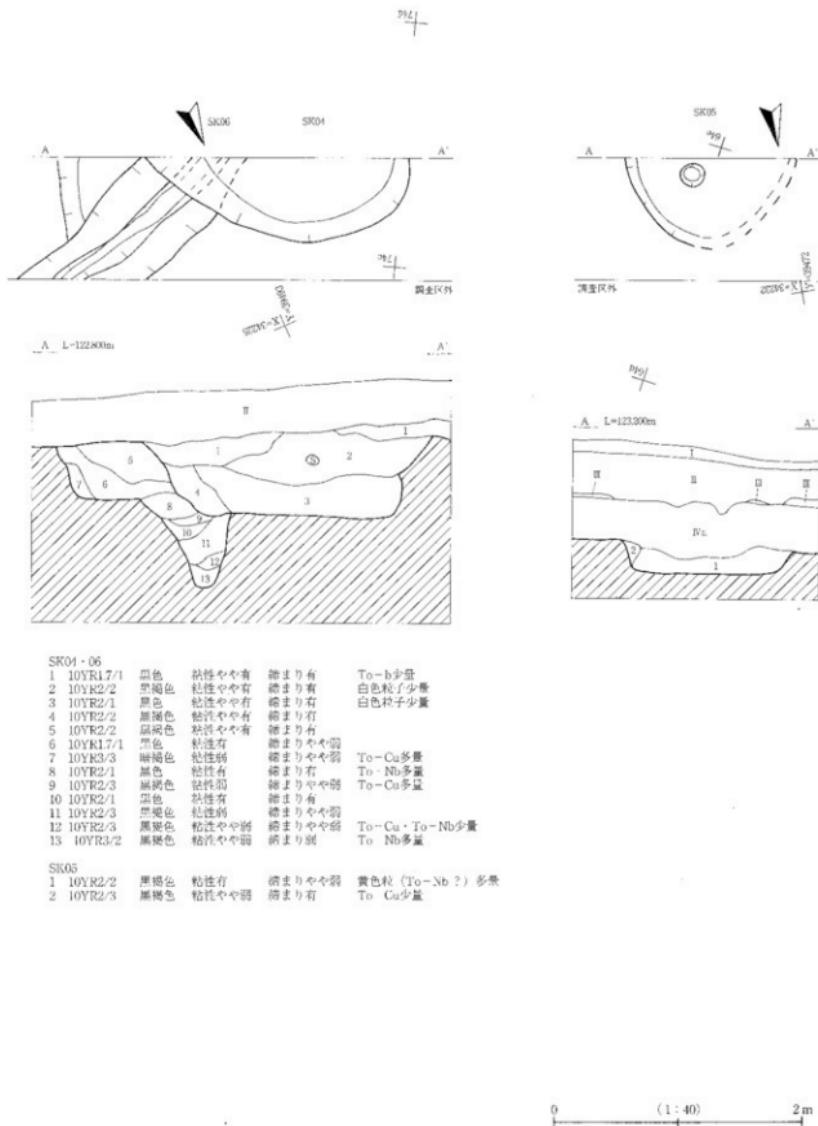
(2) 石器・石製品 (第21～24図、写真図版22～24)

201～204は石鏃で、201のみ無茎、202～204は有茎である。201はチャート、202～204は頁岩製である。205・206は頁岩製の石匙で、いずれも横長である。207～209は石錐である。207はメノウ、208・209は頁岩製である。210は楔形石器で、頁岩製である。211～217は2次加工ある剥片である。212は破断しており、石匙やスクレイパーの一部であった可能性がある。213は凝灰岩、211・212・214～217は頁岩製である。219～221は石核で、いずれも頁岩製である。上記のほか、剥片が調査区全体で7225g出土している。石材はすべて頁岩である。出土が多かったのは主に67グリッド以東の包含層である。グリッド毎の剥片出土重量・点数は第2表に示した。

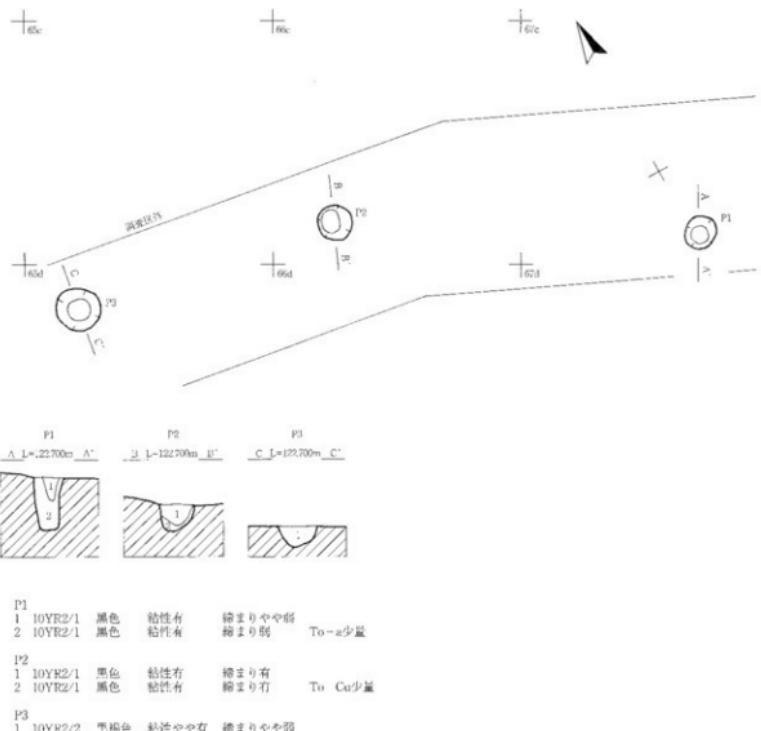
222は凝灰岩製の岩板である。破損しているが、円盤状の石材の表裏と側縁に、数条の細い沈線が刻まれる。223は磨製石斧の基部で、頁岩製である。224～229は石棒で、224は棒状、225～229は偏平である。いずれも破損している。224は砂岩、228はホルンフェルス、225～227、229は粘板岩製である。230はディサイト製の石製円盤である。231・232は安山岩製の磨石である。231は片面、232は両面に磨り痕跡が確認できる。233・234は安山岩製の凹石である。233は両面、234は片面に凹みが確認できる。235は円錐岩製の礫器で、側縁に両面からの調整が施される。236～239は石皿である。236・239はディサイト、237・238は安山岩製である。236は表面に擦痕がみられる。237・238・239は縁辺が高く、中央が窪むように加工されている。



第8図 滲構(1)

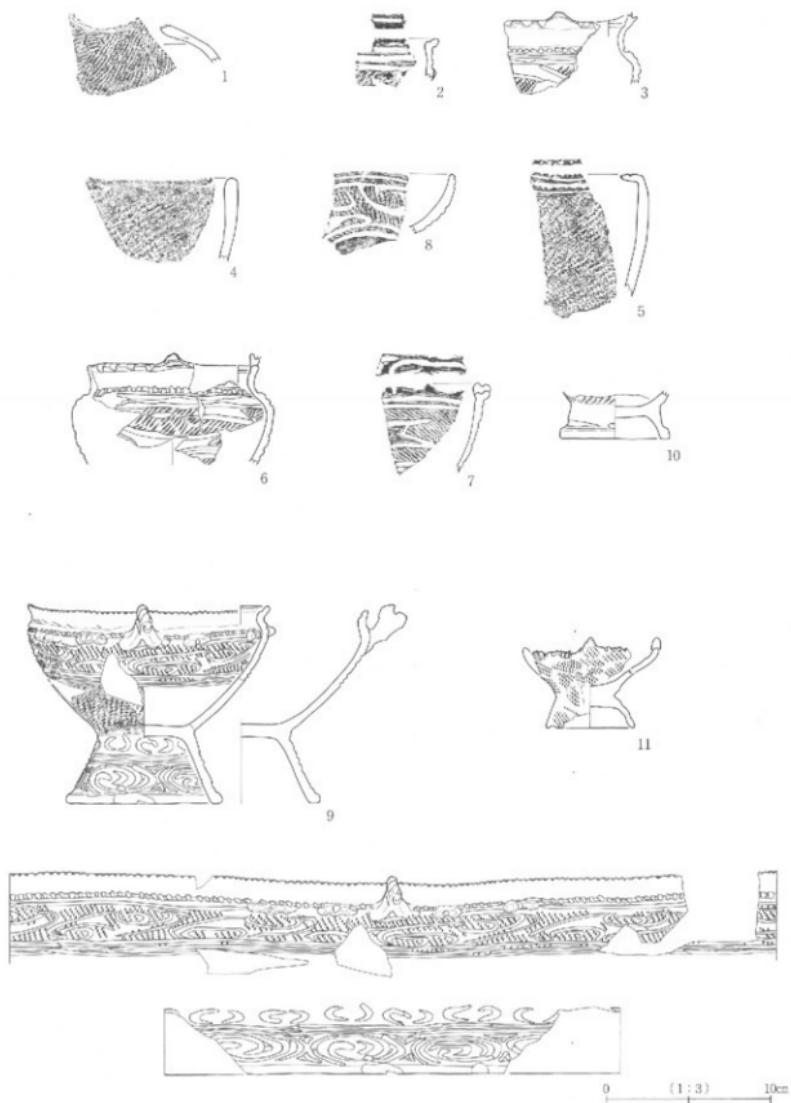


第9図 遺構(2)

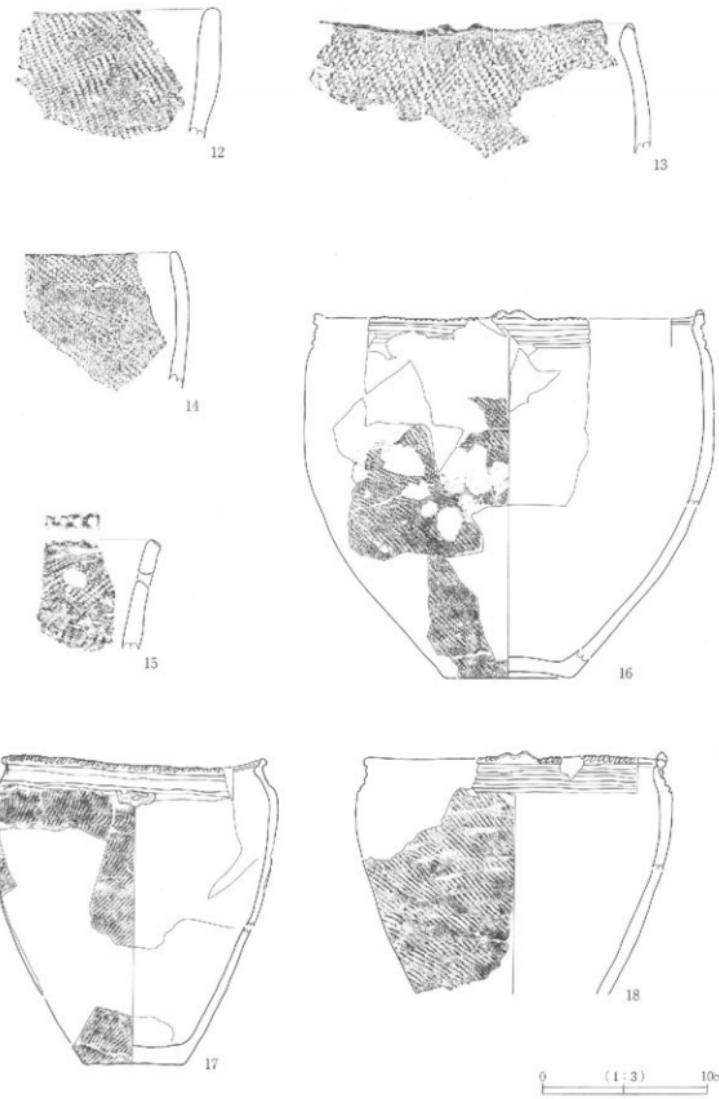


0 (1 : 40) 2 m

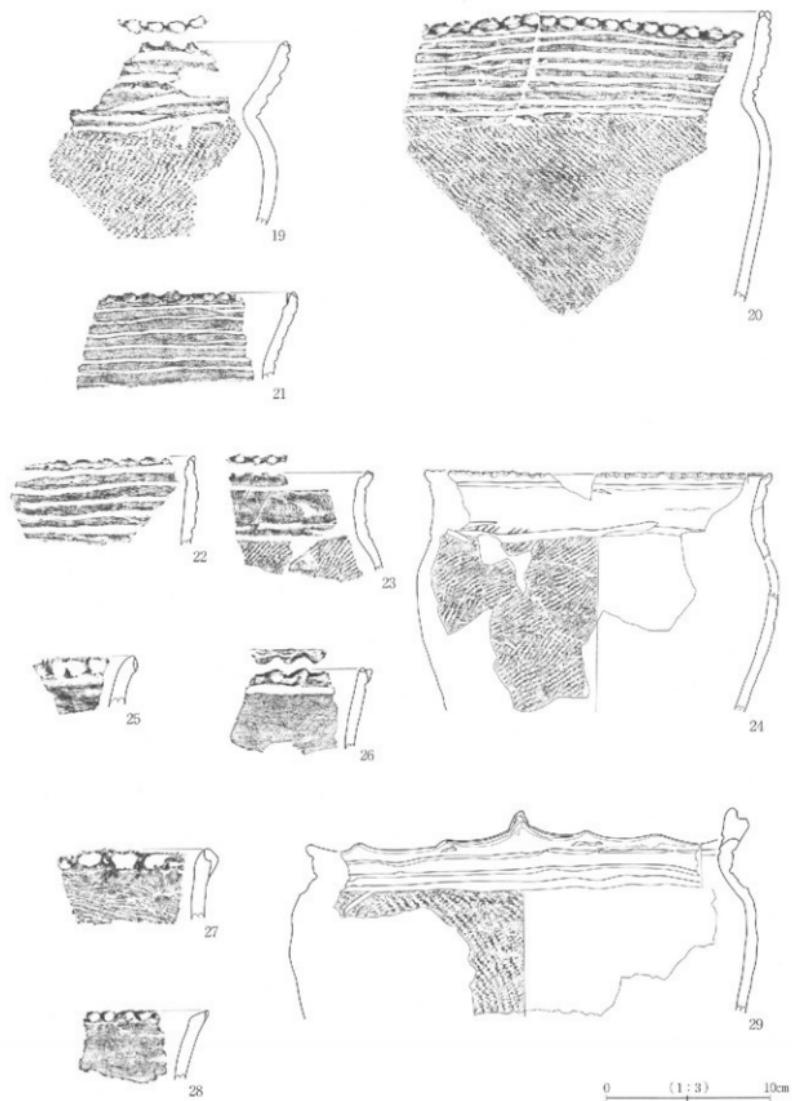
第10図 遺構 (3)



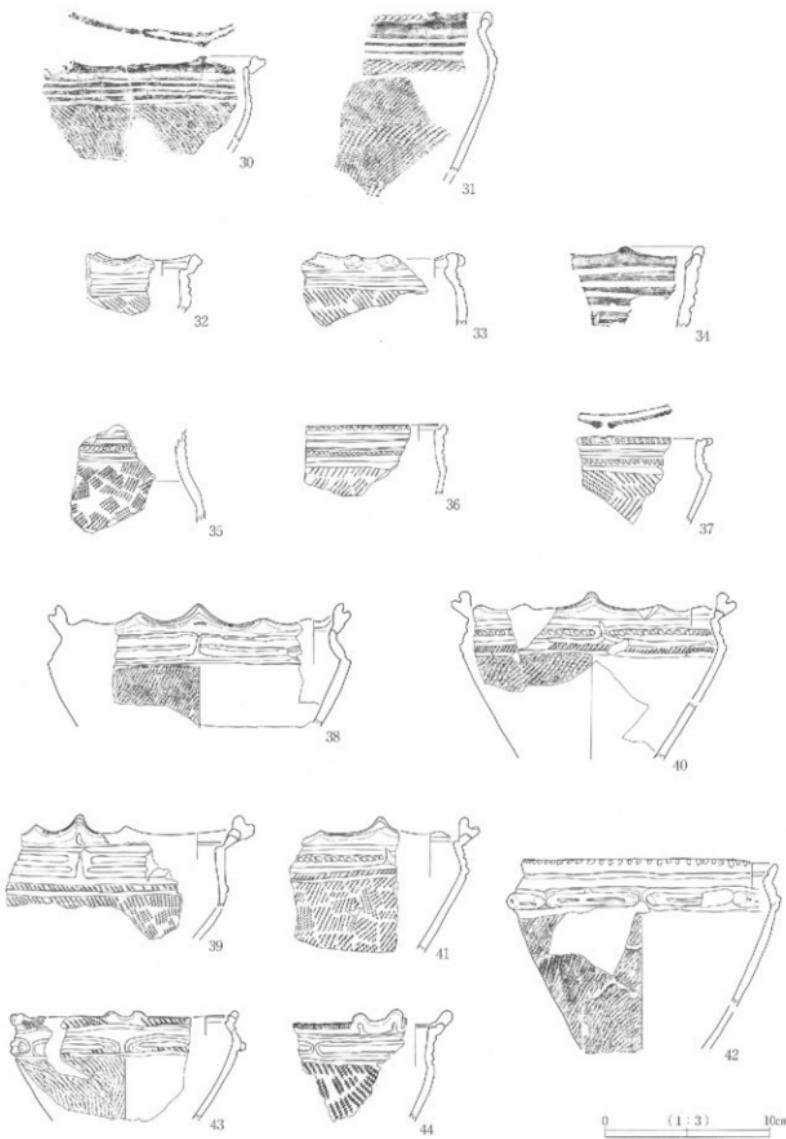
第11図 土器（1）



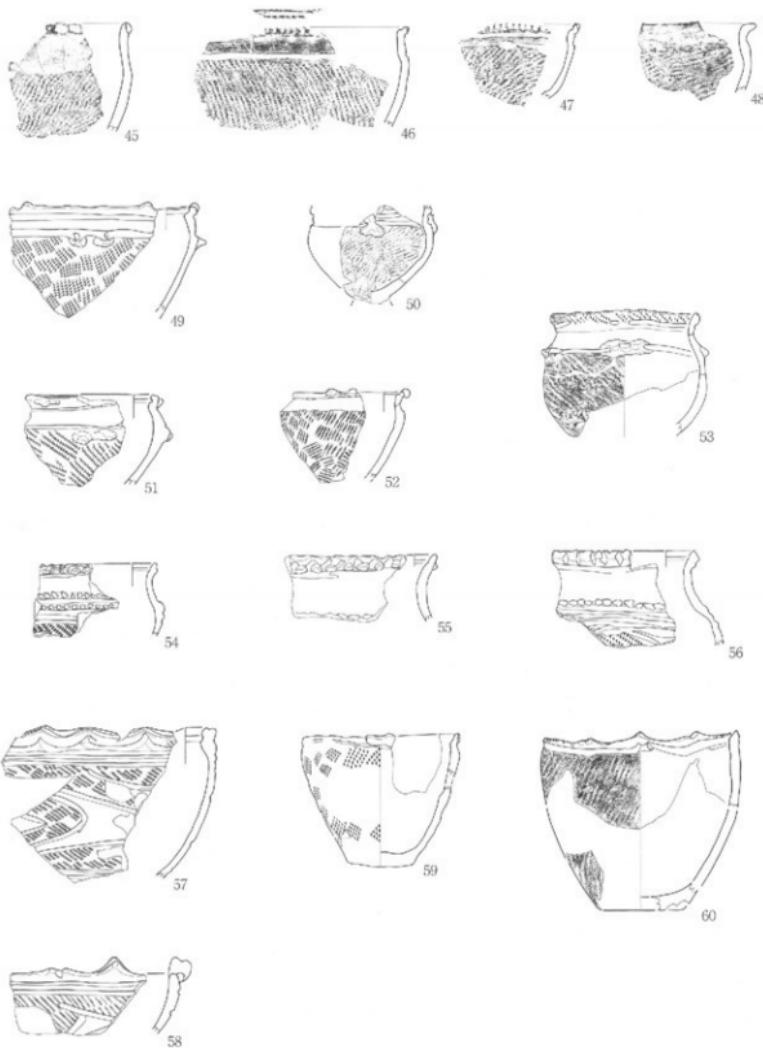
第12図 土器(2)



第13図 土器（3）

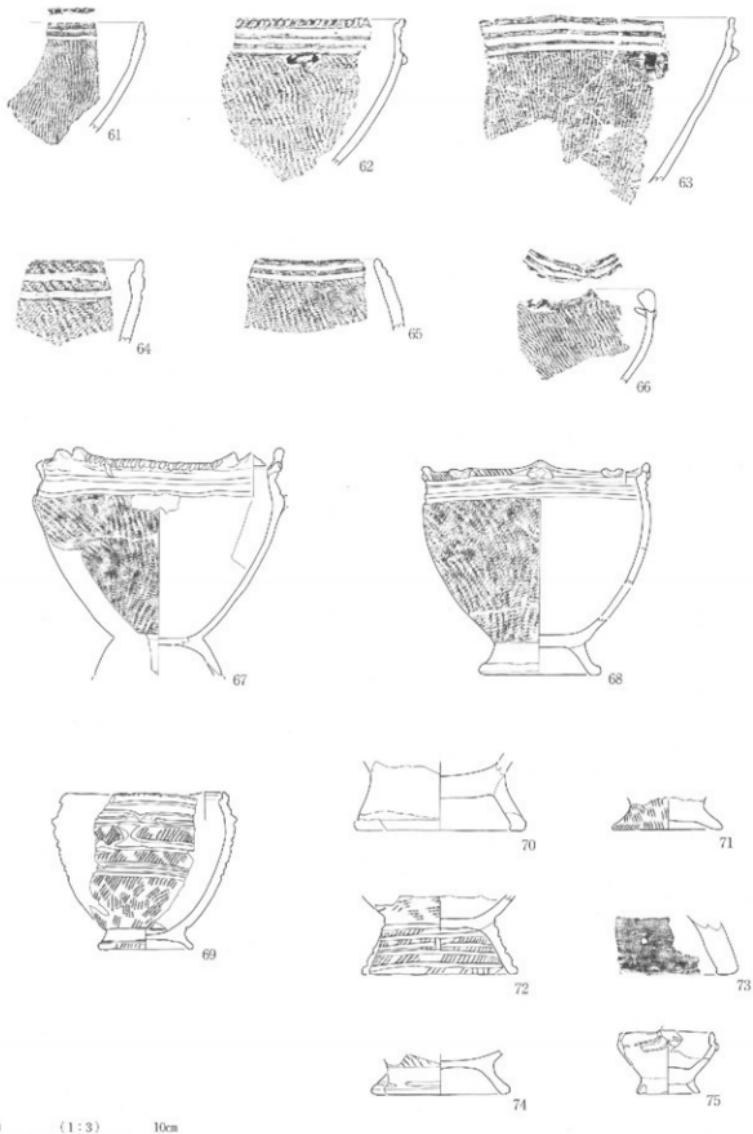


第14図 土器 (4)



0 (1 : 3) 10cm

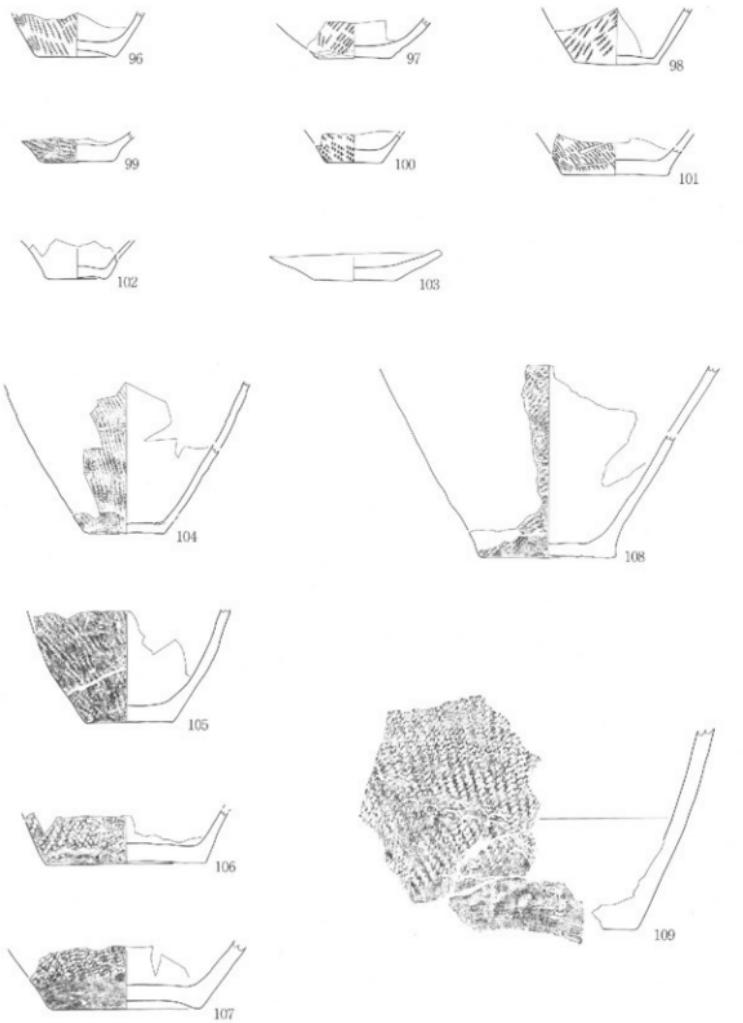
第15図 土器 (5)



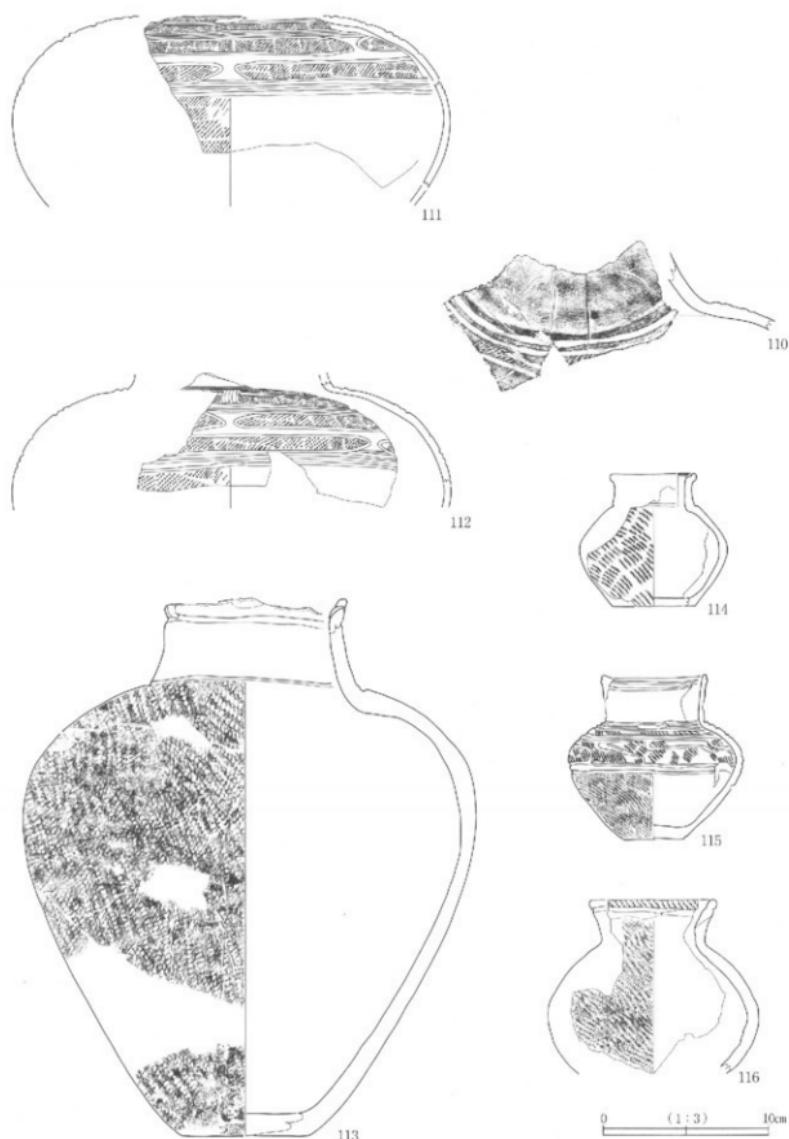
第16図 土器 (6)



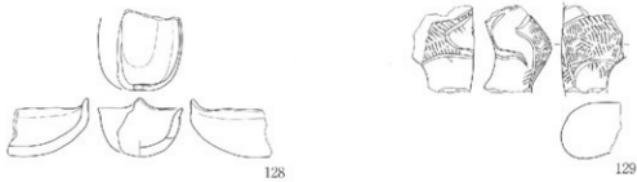
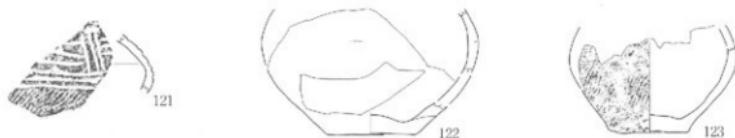
第17図 土器（7）



第18図 土器 (8)

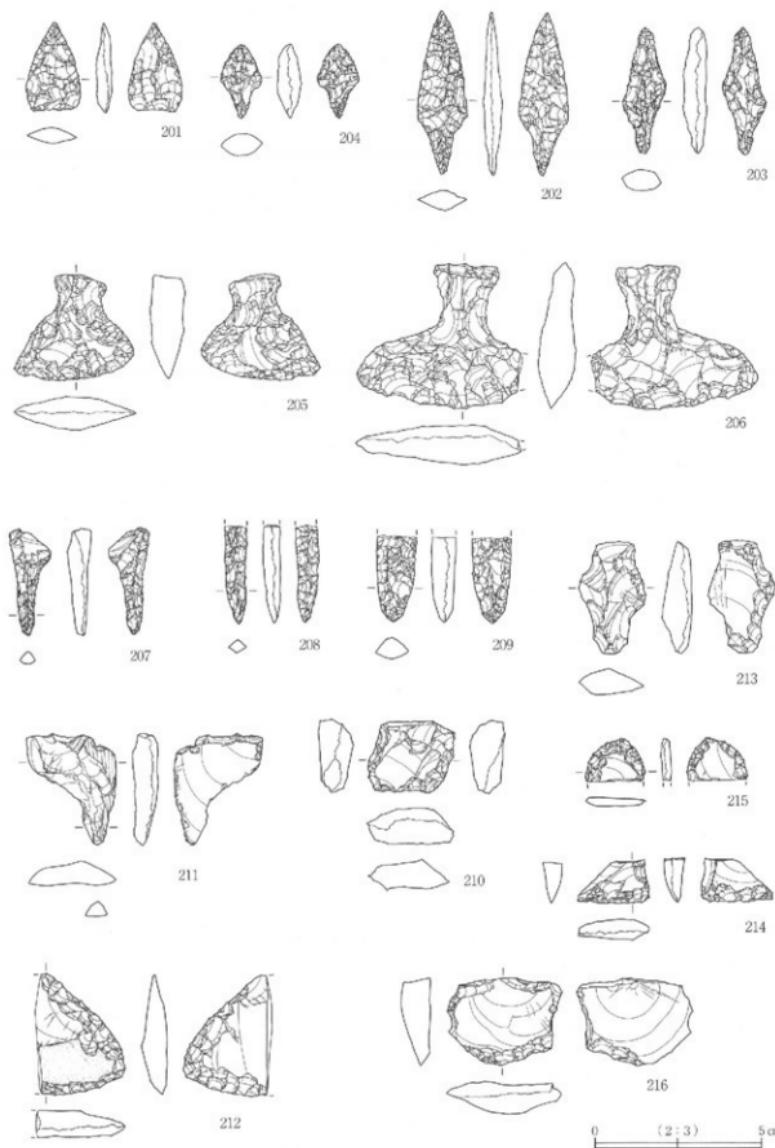


第19図 土器 (9)



0 (1 : 3) 10cm

第20図 土器 (10)



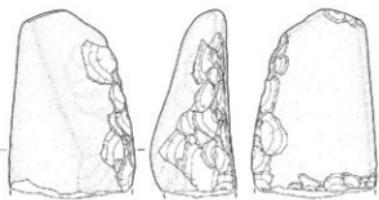
第21図 石器 (1)



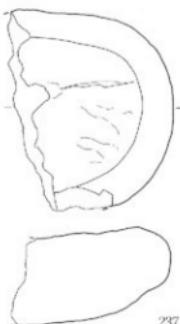
第22図 石器（2）



第23図 石器（3）



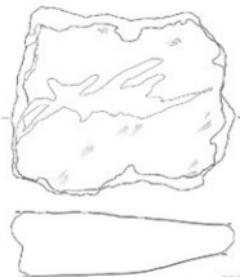
235



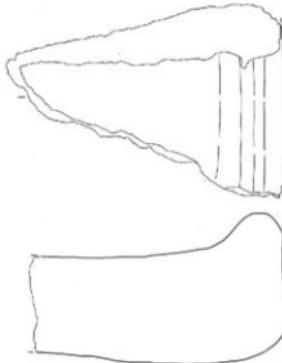
237



238



236



239

0 (1 : 3) 10cm

第24図 石器 (4)

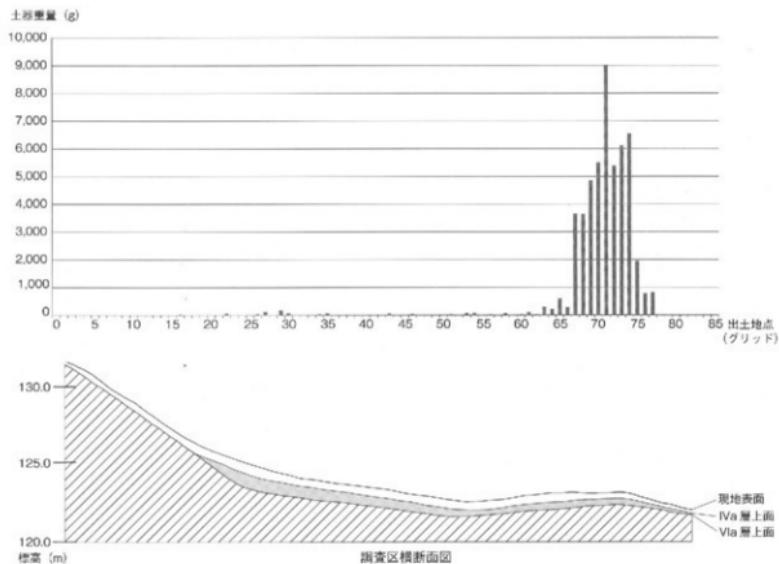
IV まとめ

今回の調査では、遺跡の北側を東西に横断する180mの範囲を調査した。遺跡内には十和田a・十和田b・十和田中振・南部テフラなどが良好に堆積する。遺構は陥し穴2基、土坑4基、柱穴状土坑3個を検出した。陥し穴・土坑は縄文時代の遺構とみられる。遺構の大半は調査区東側に多く分布する。陥し穴の存在から、縄文時代には狩猟場として利用されたと考えられる。その他の土坑の性格は不明である。住居跡の検出はなかった。

調査区東側の平坦部では縄文時代晩期の遺物包含層を確認した。遺物を包含する層は十和田bテフラを含む。遺構の一部はこの遺物包含層の下位で検出している。

包含層から出土した土器深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢・壺・ミニチュア土器・土偶などである。土器は縄文時代晩期中葉の大洞C2式に属すると考えられ、他の時期の混入は殆どない。石器は、石鎌・石匙・石錐・スクレイパー・石核・剥片・磨製石斧・石棒・岩版・磨石・凹石・石皿が出土した。

限定された範囲の調査であり、遺構・遺物は遺跡のごく一部を垣間見たに過ぎない。調査区に隣接する畠地では多くの縄文土器が表探されており、調査区外にも良好な資料が豊富に埋蔵されていることを予感させる。今後、隣接部分を調査する機会があり、遺跡の性格が明らかになっていくことを期待したい。



第25図 グリッド別土器出土重量

出土地点	土器重量(g)	上器点数(点)	率割比(%)	洞片数(点)	洞片重量(g)
グリッド16	27	2	0.05%	0	0
グリッド17	0	0	0.00%	0	0
グリッド18	0	0	0.00%	0	0
グリッド19	0	0	0.00%	0	0
グリッド20	0	0	0.00%	0	0
グリッド21	0	0	0.00%	0	0
グリッド22	65	8	0.13%	0	0
グリッド23	0	0	0.00%	0	0
グリッド24	0	0	0.00%	0	0
グリッド25	20	3	0.04%	0	0
グリッド26	47	4	0.09%	0	0
グリッド27	115	11	0.23%	0	0
グリッド28	0	0	0.00%	0	0
グリッド29	182	7	0.36%	0	0
グリッド30	68	2	0.13%	0	0
グリッド31	0	0	0.00%	0	0
グリッド32	0	0	0.00%	0	0
グリッド33	0	0	0.00%	0	0
グリッド34	34	1	0.07%	0	0
グリッド35	63	8	0.12%	0	0
グリッド36	0	0	0.00%	0	0
グリッド37	0	0	0.00%	0	0
グリッド38	0	0	0.00%	0	0
グリッド39	0	0	0.00%	0	0
グリッド40	0	0	0.00%	0	0
グリッド41	0	0	0.00%	0	0
グリッド42	0	0	0.00%	0	0
グリッド43	64	4	0.13%	0	0
グリッド44	0	0	0.00%	0	0
グリッド45	0	0	0.00%	0	0
グリッド46	46	1	0.09%	0	0
グリッド47	0	0	0.00%	0	0
グリッド48	0	0	0.00%	0	0
グリッド49	0	0	0.00%	0	0
グリッド50	16	1	0.03%	0	0
グリッド51	38	6	0.07%	0	0
グリッド52	0	0	0.00%	0	0
グリッド53	79	5	0.16%	0	0
グリッド54	84	7	0.17%	0	0
グリッド55	2	1	0.00%	0	0
グリッド56	31	4	0.06%	0	0
グリッド57	0	0	0.00%	0	0
グリッド58	68	2	0.13%	0	0
グリッド59	14	1	0.03%	0	0
グリッド60	25	3	0.05%	0	0
グリッド61	106	4	0.21%	0	0
グリッド62	35	3	0.07%	0	0
グリッド63	303	27	0.60%	0	0
グリッド64	219	22	0.43%	0	0
グリッド65	593	27	1.16%	0	0
グリッド66	278	26	0.56%	0	0
グリッド67	3,663	178	7.20%	1	39
グリッド68	3,647	318	7.17%	1	52
グリッド69	4,847	443	9.53%	5	223
グリッド70	5,505	479	10.82%	1	26
グリッド71	8,994	805	17.67%	11	81
グリッド72	5,393	481	10.60%	2	8.7
グリッド73	6,117	670	12.02%	24	138.1
グリッド74	6,541	853	12.86%	15	95.3
グリッド75	1,953	309	3.84%	8	49.8
グリッド76	791	101	1.55%	2	9.1
グリッド77	812	62	1.60%	0	0
計	50,884	4892	100.00%	70	416

第2表 グリッド別土器・洞片出土重量

第3表 土器觀察表①

第三章 土器觀察表(2)

第3表 土器断面表③

器形名	所生地元	記録	口径 直径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口部 形状	上部部 形状	下部部 形状	内壁 形状	外 形	質 等	備 考	色 調	風 化
97 プリヤ・71208-70	浜	○	45	—	—	—	—	—	—	LR	—	—	—	（古く）
98 プリヤ・71207-72	浜	○	52	—	—	—	—	—	—	LR	—	—	—	（古く）
99 プリヤ・71207-77	浜	○	47	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
100 プリヤ・71207-78	浜	○	35	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
101 プリヤ・71207-79	浜	○	64	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
102 プリヤ・71207-80	浜	○	38	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
103 プリヤ・71207-81	浜	○	51	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
104 プリヤ・71207-71208-71209-72206-70	浜	○	54	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
105 プリヤ・71207-82	浜	○	98	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
106 プリヤ・71207-83	浜	○	92	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
107 プリヤ・71207-84	浜	○	82	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
108 プリヤ・71207-85	浜	○	82	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
109 プリヤ・71207-86	浜	○	82	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
110 プリヤ・71207-87	浜	○	82	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
111 プリヤ・71207-88	浜	○	26.7	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
112 プリヤ・71207-89	火	○	26.7	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
113 プリヤ・71207-90	火	○	11.1	22.8	7.8	平	直	直	直	RL	—	—	—	（古く）
114 プリヤ・71207-91	火	○	52	80	52	下	直	直	直	RL	—	—	—	（古く）
115 プリヤ・71207-92	火	○	65	106	11.1	22.8	直	直	直	RL	—	—	—	（古く）
116 プリヤ・71207-93	火	○	72.5	12.8	—	—	直	直	直	RL	—	—	—	（古く）
117 プリヤ・71207-94	火	○	30	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
118 プリヤ・71207-95	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
119 プリヤ・71207-96	火	○	54	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
120 プリヤ・71207-97	火	○	60	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
121 プリヤ・71207-98	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
122 プリヤ・71207-99	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
123 プリヤ・71207-100	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
124 プリヤ・71207-101	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
125 プリヤ・71207-102	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
126 プリヤ・71207-103	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
127 プリヤ・71207-104	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
128 プリヤ・71207-105	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）
129 プリヤ・71207-106	火	○	—	—	—	—	—	—	—	RL	—	—	—	（古く）

第4表 石器断面長

種類	経年	肉上側部	肉下側部	横径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	年代
201 万歳	SC2 SC 鋸上端	270	170	0.30	1.8	チヤート	北上地	半三世-金光・ジュラ紀
202 万歳	クリフ725 破片	530	150	0.60	2.7	黒	見出山脈	萬葉時代-古第三紀
203 万歳	クリフ722 破片	350	125	0.70	2.7	黒	見出山脈	萬葉時代-古第三紀
204 万歳	クリフ724 破片	25	120	0.75	1.6	青閃	見出山脈	新代斯第三紀
205 万歳	薄刃内凹 手土	320	370	1.10	10.2	5.25	黒	見出山脈
206 万歳	クリフ720 銃口	450	*5.00	1.10	*1.4	白	見出山脈	
207 万歳	クリフ724 銃口	360	125	0.75	1.8	ノフ	見出山脈	
208 万歳	クリフ720 手土	*350	920	0.65	*1.3	白	見出山脈	
209 万歳	薄刃外凹 手土	*265	120	0.75	*2.7	灰	見出山脈	
210 万歳	クリフ723 手土	230	260	1.00	6.8	青	見出山脈	
211 万歳?	薄刃外凹 手土	340	270	0.80	3.3	灰岩	見出山脈	
212 万歳?	クリフ69 破片	*370	270	0.80	*8.0	白	見出山脈	
213 万歳?	クリフ721 手土	390	235	0.90	*3.9	淡青	見出山脈	
214 二重刃	薄刃外凹 手土	120	220	0.55	*1.6	白	見出山脈	
215 二重刃	細小切刃 手土	120	180	0.55	*1.0	白	見出山脈	
216 二重刃	細小切刃 手土	350	270	1.00	8.6	青	見出山脈	
217 二重刃	細小切刃 手土	365	330	1.20	21.3	白	見出山脈	
218 二重刃	手土	400	450	0.85	9.0	白	見出山脈	
219 二重刃	圓盤状内凹 手土	380	400	2.70	47.4	白	見出山脈	
220 二重刃	クリフ725 手土	420	430	1.60	30.2	青	見出山脈	
221 万歳	薄刃外凹 手土	620	810	1.00	19.6	青	見出山脈	
222 万歳	クリフ66 銃口	*420	520	1.50	*5.1	青	見出山脈	
223 万歳	クリフ723 銃口	*265	*170	*1.25	41.0	青	見出山脈	
224 6歳	クリフ723	510	255	2.50	11.9	青	見出山脈	
225 6歳	クリフ721 手土	*650	*250	*0.60	*15.3	白	見出山脈	
226 6歳	クリフ722 手土	*510	270	0.40	*10.2	灰	見出山脈	
227 6歳	クリフ722 手土	*535	245	*0.70	*10.5	灰	見出山脈	
228 6歳	クリフ53 手土	*1125	*430	0.90	*56.5	ホルンフェルス	見出山脈	
229 6歳	クリフ723 手土	*1300	410	0.80	*80.0	灰	見出山脈	
230 6歳	クリフ724 手土	590	605	2.15	11.0	ダイサイト	見出山脈	
231 6歳	クリフ722 手土	*650	550	*0.25	*23.6	安山岩	見出山脈	
232 6歳	クリフ723 手土	1100	680	4.00	47.3	安山岩	見出山脈	
233 6歳	クリフ722 手土	605	670	3.75	26.5	安山岩	見出山脈	
234 6歳	クリフ721 手土	1140	715	4.15	46.3	安山岩	見出山脈	
235 6歳	クリフ56 手土	*1100	790	5.10	59.5	花崗岩	見出山脈	
236 6歳	薄刃外凹 手土	*1100	*1350	4.00	*32.5	ノフ	見出山脈	
237 6歳	薄刃外凹 手土	*1000	1230	5.30	*10.2	安山岩	見出山脈	
238 6歳	クリフ727 手土	*1470	*1760	5.10	*30.6	安山岩	見出山脈	
239 6歳	クリフ720 手土	*1190	*1680	9.20	*65.9	チヤク	見出山脈	

*印は断面形状の変化を示す。

V 自然科学分析

上町遺跡における火山灰分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県二戸市金田一に所在する上町遺跡は、北上山地北部を流れる馬淵川中流域の左岸に分布する狹小な段丘平坦面上に立地する。大池ほか(1966)による段丘区分では、十和田八戸テフラの火碎流堆積物を段丘構成層とする福岡面に対比されている。

今回の発掘調査では、縄文時代晩期頃とされる陥穴などの遺構や同時期の縄文土器や石器などの遺物が検出されている。この縄文時代晩期の遺物包含層を構成している土層は、黒色を呈する火山灰土いわゆる黒ボク土であるが、その層位には白色粒子の散在が認められている。調査区では、遺物包含層の上位に平安時代10世紀初頭に噴出した十和田aテフラ(To-a)の降下堆積層、下位に縄文時代前期の約6000年前に噴出した十和田中振テフラ(To-Cu)の降下堆積層が確認されていることから、遺物包含層中の白色粒子についても、テフラに由来する碎屑物である可能性のあることが指摘されている。

今回の分析調査では、この白色粒子を含む包含層中の碎屑物の性状を明らかにし、テフラに由来する碎屑物が確認された場合には、既知のテフラとの対比を行う。

1 試 料

調査区の基本層序は、上位よりI層からVII層まで分層されている。I層は盛土であり、II層は盛土直下の暗褐色土、その下位のIII層がTo-aの降下堆積層、V層がTo-Cuの降下堆積層、VII層が十和田南部テフラ(To-Nb)の降下堆積層とされている。To-aとTo-Cuの間層であるIV層は、黒ボク土層であり、上位よりIVa、IVb、IVc層に細分されている。これらのうち、IVa層は黒色を呈する縄文時代の遺物包含層であり、白色粒子の散在が認められている。IVb層は黒褐色土、IVc層は暗褐色土である。To-CuとTo-Nbの間層であるVI層も黒ボク土であり、To-Nbに由来する軽石を少量含む上位のVIa層と同軽石を多量に含む下位のVIb層に細分されている。

試料は、28グリッド基本層序IのIVa層より採取された黒ボク土1点で、試料にはNo.2の番号が付されている。(第6・7図)

2 分析方法

ここでは、テフラの検出同定により碎屑物全体の状況を確認し、重鉱物組成と火山ガラス比を求め、さらに火山ガラスについては屈折率の測定を行う。各分析法の処理手順は、以下の通りである。

(1) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量

の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタンクステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した重鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述のテフラ分析に準ずる。

(3) 屈折率測定

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3 結 果

(1) テフラの検出同定

試料には、中量の軽石と微量の火山ガラスが認められた。軽石は、最大径約7mmであり、灰白色を呈し、発泡不良なものが多く、白色を呈し、発泡のやや良好な軽石も微量含まれる。ただし、後の軽石は、粒径1mm以下の細粒軽石である。火山ガラスは無色透明の塊状の軽石型である。

また試料中には、径1.5~3mm程度の暗灰色、灰黒色および赤褐色を呈する比較的新鮮な安山岩の岩石片が少量混在し、微量の黒曜石の破碎片と見られる碎屑物も認められた。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成では、斜方輝石が多く、約60%を占め、次いで不透明鉱物が20数%あり、10数%の単斜輝石を伴うという組成である。火山ガラス比では、軽石型火山ガラスが少量含まれ、極めて微量の中間型も含まれる。

(3) 屈折率測定

結果を図2に示す。火山ガラスは、n1.506~1.510のレンジに入り、n1.507~1.509にモードがある。

4 考 察

No.2試料のテフラ分析結果から、IVa層中に認められた白色粒子は軽石であると判断される。上町遺跡の地理的位置と、To-CuとTo-aに挟まれたIVa層の層位に基づけば、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981；1984）、Arai et al. (1986)、町田・新井（2003）

など)との比較から、IV a層中の軽石は、十和田カルデラを給源とする十和田bテフラ(To-b)に由来する可能性がある。また、軽石の色調や発泡度および安山岩片や黒曜石片を伴うことなどは、松山・大池(1986)によるTo-bの記載とよく一致する。両輝石からなる重鉱物組成もTo-bのそれと同様であり、IV a層中の軽石がTo-bに由来することを支持している。

一方、火山ガラスの屈折率については、町田・新井(2003)に記載されたTo-bの火山ガラスの屈折率n1.498-1.501とは明らかにレンジが異なっており、むしろTo-aの火山ガラスの屈折率とレンジが重複する。この結果については、測定した細粒の火山ガラスは、上位のTo-a降下堆積層からの落ち込みに由来する可能性と、To-bの中でも降下ユニットによって屈折率の異なる火山ガラスが含まれている可能性の両者を想定することができる。降下ユニットによって火山ガラスの屈折率が異なることは、上位のTo-aでは町田ほか(1981)により確認されている。現時点では、検討材料が不十分なため、両者の可能性のいずれが高いかを判断することはできない。周辺の事例研究も含めて、今後の課題としたい。

なお、To-bの噴出年代は、町田・新井(2003)により約2000年前とされている。IV a層中の軽石がTo-bとした場合に、縄文時代晩期の遺物と混在することについては、特に層位的な矛盾はない。

引用文献

- Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T., Yamagata, K. 1986. Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II -Tephra occurring in Northeast Honshu and Hokkaido- Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21, 223-250.
- 古澤 明 1995 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌, 101, 123-133.
- 早川由紀夫・小山真入 1998 日本海をはさんで10世紀に相次いで起きた二つの大噴火の年月-十和田湖と白樺湖-火山. 43, 403-407.
- 町田 洋・新井房夫 2003 新編 火山灰アトラス.東京大学出版会.336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 1981 日本海を渡ってきたテフラ.科学, 51, 562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-波波直經(編)古文化財に関する保存科学と人文学.自然科学院朋友会, 865-928.
- 松山 力・大池昭二 1986 十和田火山噴出物と火山活動.十和田科学博物館, No. 4. 1-64. 十和田開発株式会社.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 1966 馬瀬川中・下流沿岸の段丘と火山灰.第四紀研究, 5, 29-35.

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試 料 名	斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	合 計	ガバ ブル ラ型 火 山	ガ 中 間 ラ型 火 山	ガ 輕 石 ラ型 火 山	そ の 他	合 計
No.2 28グリッド IVa層	152	37	59	2	250	0	2	14	234	250



図1 重鉱物組成および火山ガラス比

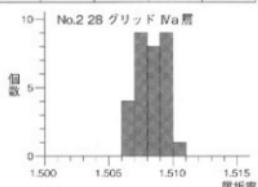


図2 火山ガラスの屈折比

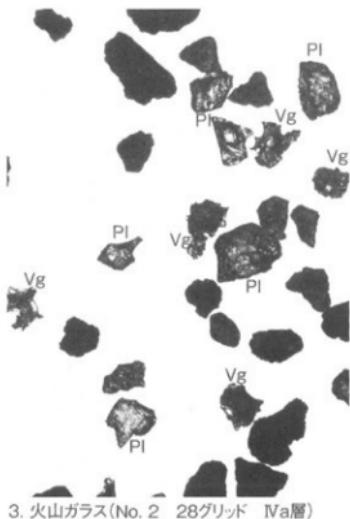
図版1 軽石・重鉱物・火山ガラス



1. 軽石 (No. 2 28グリッド IVa層)



2. 重鉱物 (No. 2 28グリッド IVa層)



3. 火山ガラス (No. 2 28グリッド IVa層)

2.0mm
1

0.5mm
2,3

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Op:不透明鉱物.
Vg:火山ガラス. Pl:斜長石.



遺跡周辺 (←西)



遺跡周辺 (←北)

写真図版 1 航空写真 (1)



調査区周辺（←北西）



調査区全体（←南西）

写真図版 2 航空写真（2）



調査区全景 (← 南東)



調査区全景 (← 北西)

写真図版 3 遺跡全景



基本層序 1 (←南)



基本層序 4 (←南)

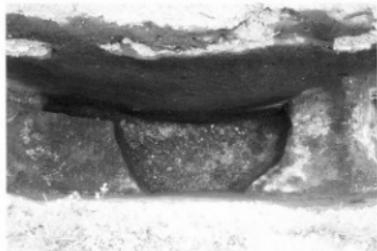


基本層序 2 (←南)

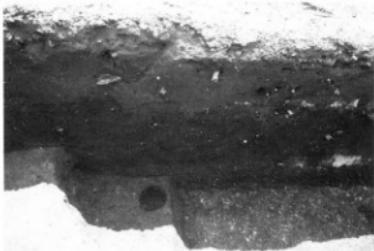


基本層序 3 (←南)

写真図版 4 基本層序



SK01完掘（←南）



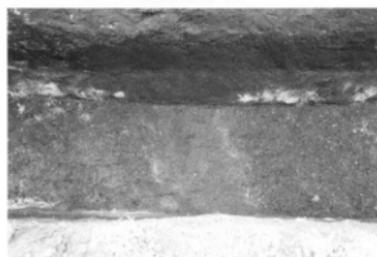
SK05完掘（←北）



SK02断面（←西）



SK02完掘（←西）



SK03検出（←南）



SK03完掘（←南）



SK04・06完掘（←北）



SK04・06完掘（←東）

写真図版 5 遺構



遺物出土状況（←東）

写真図版 6 遺物出土状況（1）

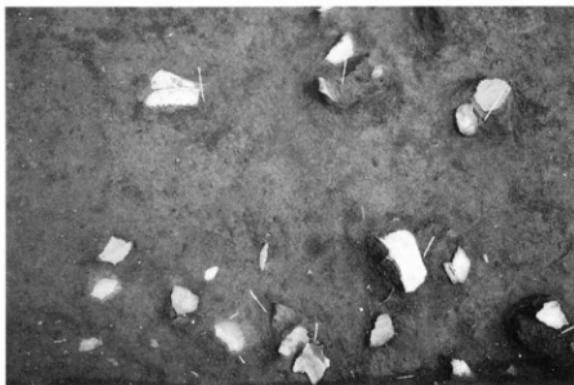
遺物出土状況（←南）



遺物出土状況（←南）



遺物出土状況（←南）



写真図版7 遺物出土状況（2）

遺物出土状況（←西）



遺物出土状況（→東）



遺物取り上げ状況（→東）



写真図版 8 遺物出土状況（3）

遺物出土状況（←西）



遺物出土状況（←南）



遺物出土状況（←西）



写真図版 9 遺物出土状況（4）

グリッド1付近 (←西)



グリッド11付近 (←西)



グリッド25付近 (←西)



写真図版10 検出状況 (1)



グリッド44付近 (←西)



グリッド54付近 (←西)



グリッド82付近 (←東)

写真図版11 検出状況 (2)



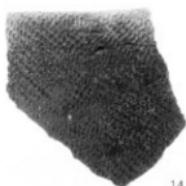
写真図版12 土器 (1)



12



13



14



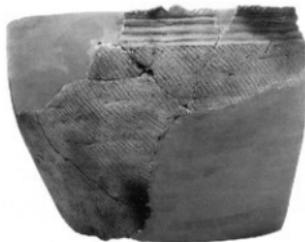
16



15



17



18

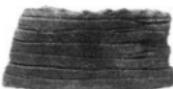
写真図版13 土器（2）



19



20



21



22



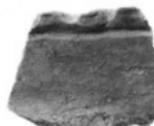
23



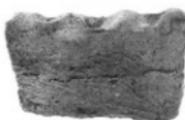
24



25



26



27

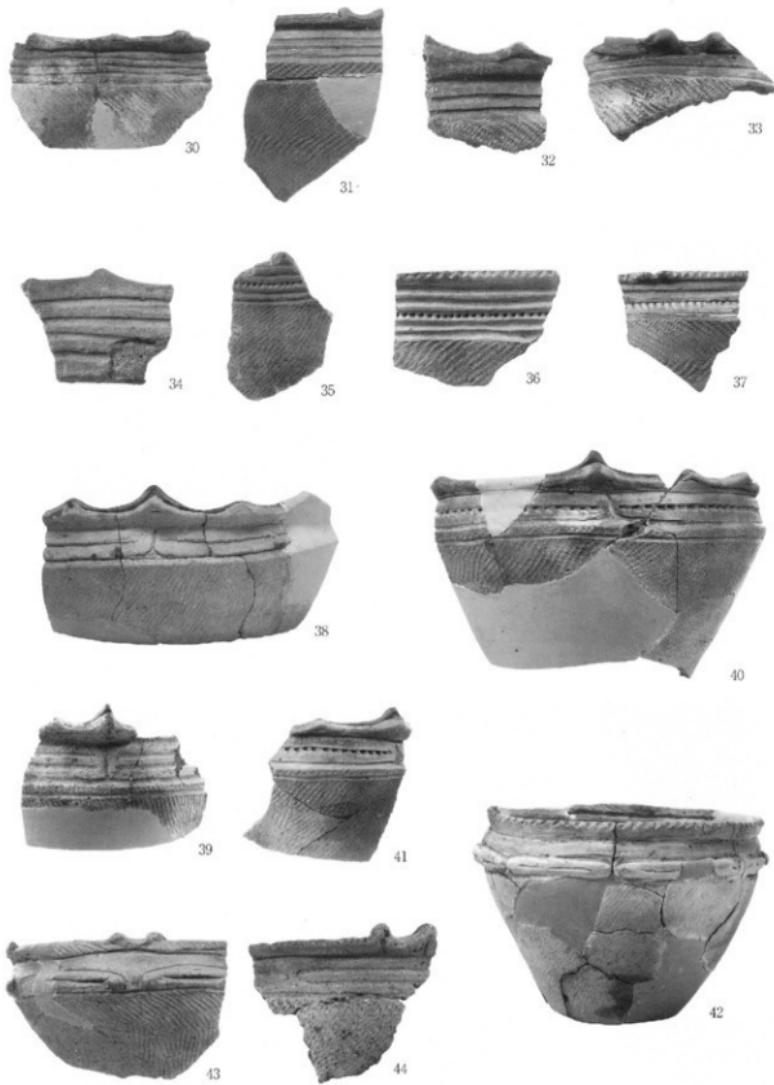


28

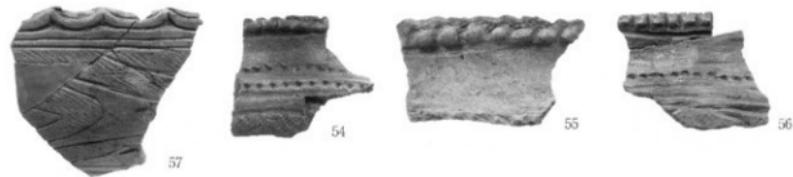
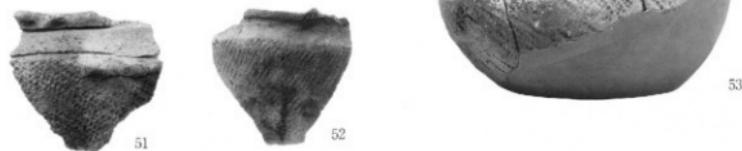
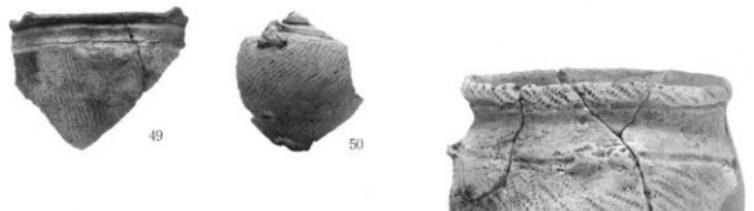
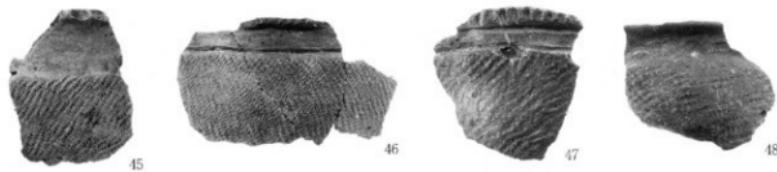


29

写真図版14 土器（3）



写真図版15 土器 (4)



写真図版16 土器（5）



61



62



63



64



65



66



67



70



71



68



72



73



74



75

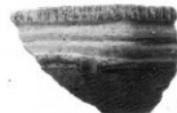
写真図版17 土器 (6)



76



77



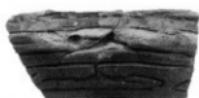
78



79



80



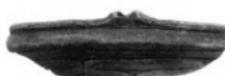
81



82



83



84



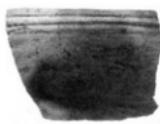
85



86



88



89



90



91



95



92



93

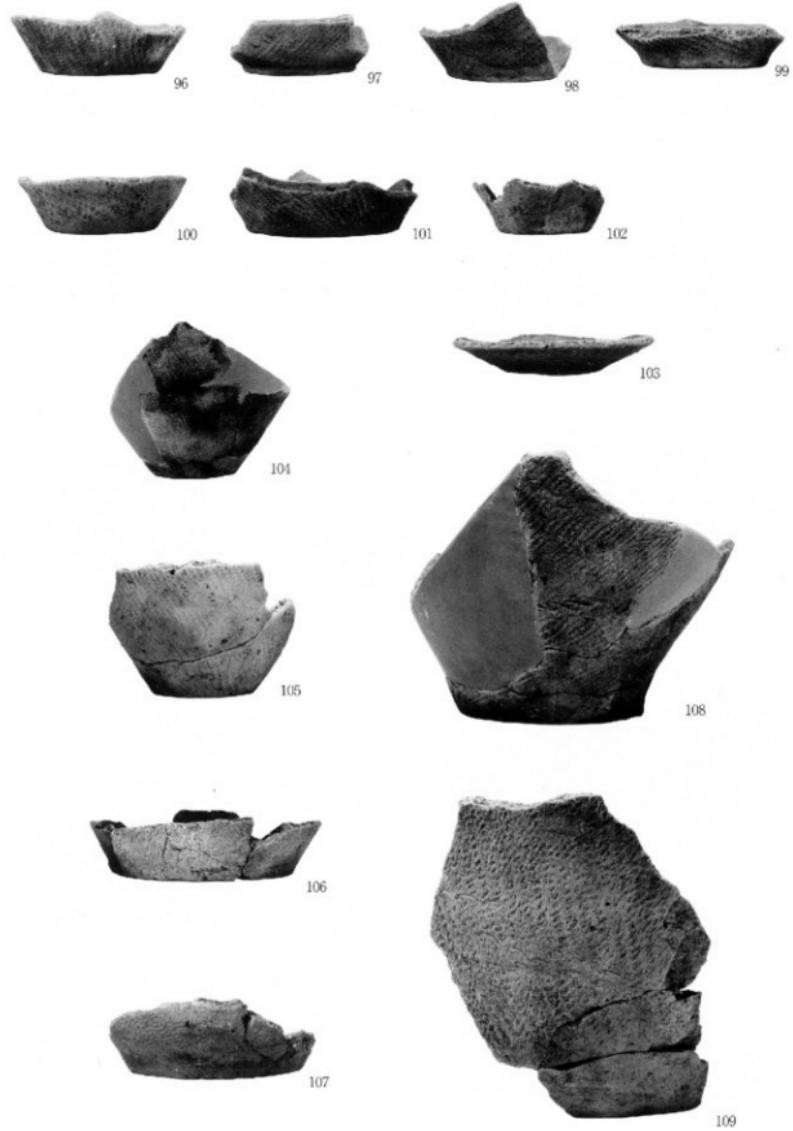


94

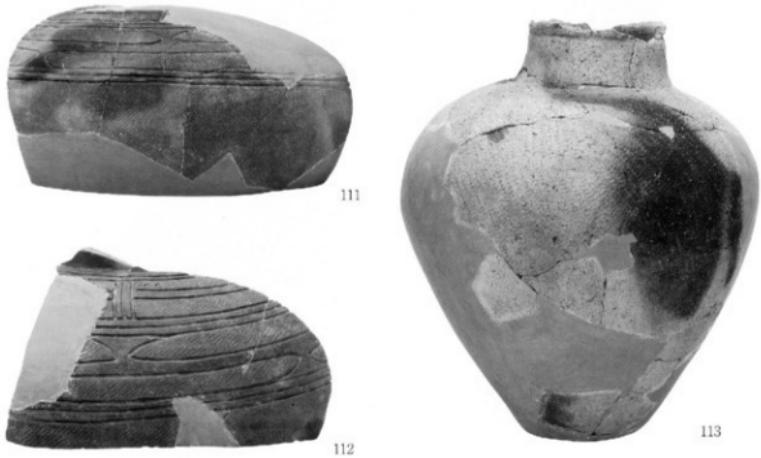
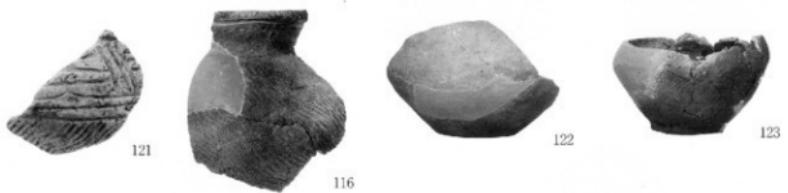


87

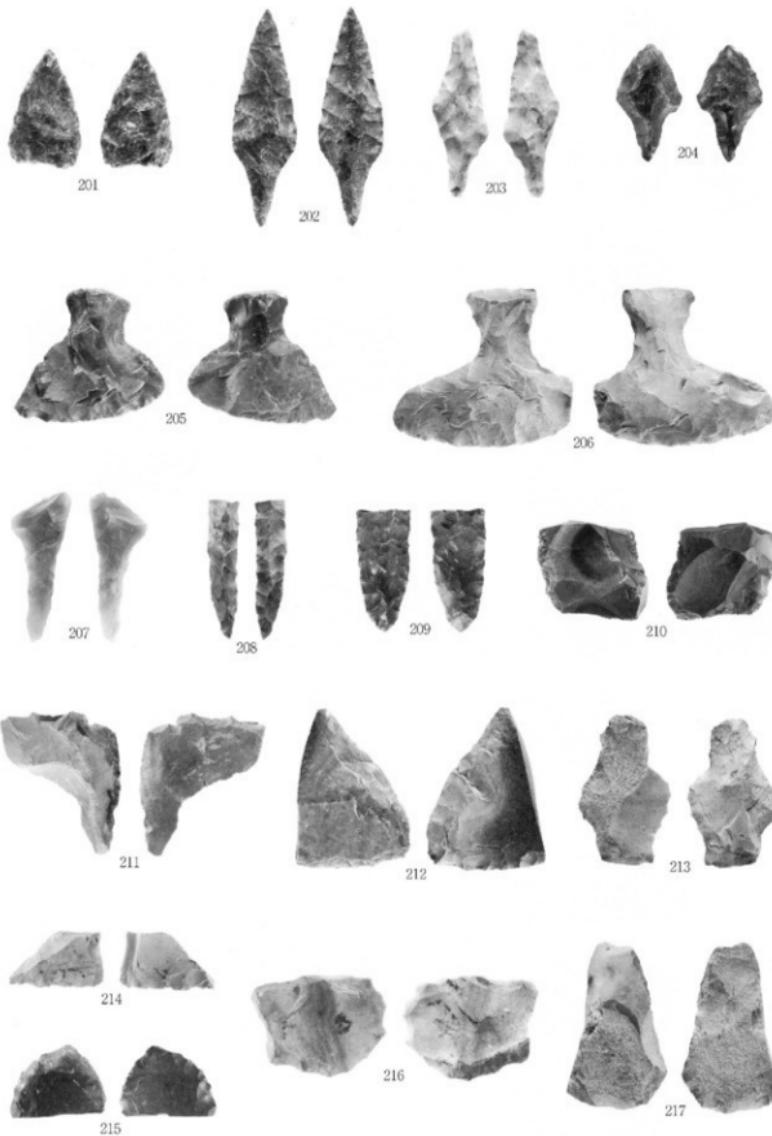
写真図版18 土器 (7)



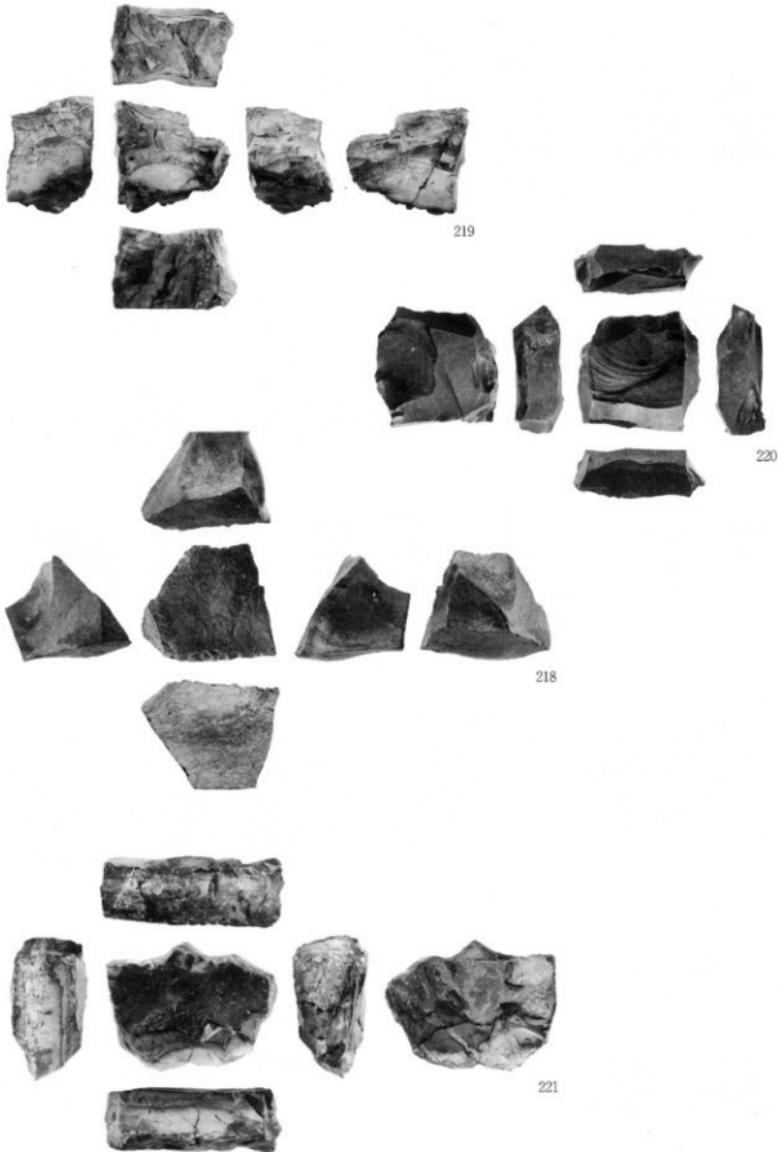
写真図版19 土器（8）



写真図版20 土器 (9)



写真図版21 石器（1）



写真図版22 石器（2）



222



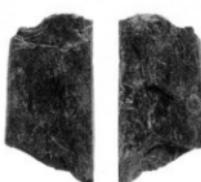
223



224



225



226



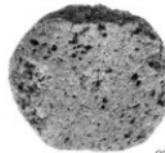
227



228



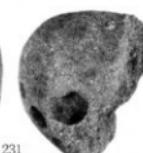
229



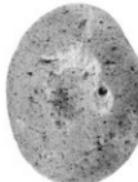
230



231



232



233



234

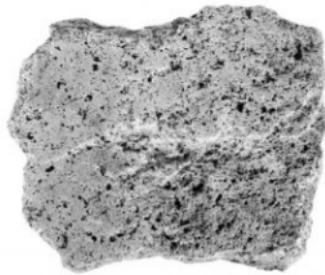
写真図版23 石器（3）



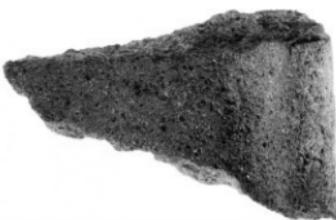
235



237



236



239



238

写真図版24 石器 (4)

報告書抄録

ふりがな	かみまちいせきはくつちょうさほうこくしょ					
書名	上町遺跡発掘調査報告書					
副書名	馬淵川沿岸（一期）農業水利事業関連遺跡発掘調査					
巻次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第532集					
編著者名	川又晋					
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001					
発行年月日	2008年10月31日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
上町遺跡	岩手県二戸市金田一丁目新田野26-7ほか	IE89-03213	2346	40度 18分 32秒	141度 17分 51秒	2007.04.09 ～ 2007.05.14
馬淵川沿岸（一期）農業水利事業に伴う緊急発掘調査	180m ²					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
上町遺跡	散布地 狩猟場	縄文時代	陥し穴 上坑 柱穴状土坑	2基 4基 3個	縄文土器晩期中葉（大洞C2式期）深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢・壺・土偶 石鏡・石匙・石錐・石核・剥片・磨製石斧・石棒・磨石・門石・石皿	
要約	上町遺跡は、IGRいわて銀河鉄道金田一温泉駅の南方約2km、馬淵川左岸の河岸段丘上に立地する。調査区周辺は東向きの緩斜面で、標高122～130mである。平成19年度調査においては、陥し穴2基、上坑4基などを検出した他、遺物包含層では縄文時代晩期中葉（大洞C2式期）の土器が出土した。					

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第532集

上町遺跡発掘調査報告書

馬淵川沿岸（一期）農業水利事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成20年10月27日

発 行 平成20年10月31日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

発 行 農林水産省東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所
〒028-5312 岩手県二戸郡一戸町一戸字大越田98-6
電話 (019)32-2121

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019)654-2235

印 刷 株式会社 阿部印刷
〒020-0873 盛岡市松尾町2-2
電話 (019)624-2242

